
千の夜を越えて～虹の彼方へsecond story～

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の夜を越えて〜虹の彼方へsecond story〜

【Nコード】

N9100M

【作者名】

みかん

【あらすじ】

祝&感謝！1000アクセス突破 ありがとうございます

“虹の彼方へ”の続編です。

序章で“虹の彼方へ”の概要を書いていますので、“虹の彼方へ”を未読の方も、十分本作からでもお楽しみ頂けると思います。

どうぞご覧ください！！。

神楽とのぎこちない関係に悩む妃音に、如月の恋が絡んでとんでもなく波乱の予感が！？

今回もまた不器用な2人が2人を見守る周りの人達を巻き込んで時空を越えたドラマが繰り広げられます。

良かったらご一読下さい

く序章く（訂正版）夢の果て

これは、今から何世紀も先のお話。

地球は“国”と言う概念を無くし、

宇宙もまた“惑星”と言う概念が無くなって、

“惑星”が1つの“国”として機能している時代。

ある惑星に1人の皇女様がおりました。

「おはようございます、妃杏様。」

『おはようございます、神楽様。』

地球から程近く、環境も地球に似ている琉冠星と言う名の惑星。

皇女様の名は妃杏。

男女兄弟関係なく、皇家に産まれた時に、琉冠星の守護神とも言っ

べき“プラチナムマウンテン”の鉱石、

“プラチナムストーン”

と言う名の石が反応した者が次期皇位継承者となり、妃杏はその、次期皇位継承者なのである。

「妃杏様、ワタクシに“様”はお止め下さい。」

神楽があたふたする。

神楽は妃杏付のエージェント（SP）で、妃杏のマネージャーである。

この神楽、神楽が7歳の時に大ケガを負ったのだが、

その場に居合わせた、まだ若干2歳の妃杏に迅速かつ的確な処置を施されて以来、

“インペリアルゲート”にゲートインし、次期後継者の妃杏に仕えるコトだけを目指して来た。

インペリアルゲートとは言わば宮内庁のような機関で、皇家直結の国家機関である。

皇家の護衛・執務を担当するこの機関は、国家の最高機関であるため、入るにもかなり困難。

その前にまず、養成機関の“アカデミア”に入学しなければならぬのだが、これもまたハイレベル。

“インペリアルゲート”イコール“国民の代表”と言う位置付けにあるため、

アカデミアにいる間だけでなく、インペリアルゲートに入り、“エージェント”として正式採用されてからも毎月行われる考査で8割以下を取ると、即留年もしくはアカデミアからやり直しと言う厳しさのなか、

神楽は7歳の時から目指して来ただけに、アカデミアの入学試験からインペリアルゲートに入って現在に至るまで、未だにオールパーフェクト（満点）を取り続けている、

後にも先にも現れていない“伝説のエージェント”なのである。

インペリアルゲートの最高責任者である、“boss”（朱雀）の計らいで神楽は何とか晴れて念願の妃杏付の責任者^{マネージャー}に就任し、これで一件落着！！！！

・・・の、ハズだったのだが、、

『もうそろそろマネージャーとしてじゃなく、婚約者として見てもらわないとね！』

妃杏に敬語を遣われるコトに慣れてない神楽は、たじろいばかり。

無邪気に言う妃杏に、神楽は何も反論出来なかった。

“神楽はアタシのコトは後継者としてしか見ていない。アタシが言えは何でもしてくれたり、何も言わず側にいてくれたりするの、あくまでもアタシが後継者だからなダメだ！！”

と暴走する妃杏に、

“妃杏様は次期後継者様。自分はお仕え出来るダケで十分！”

と自分の気持ちを隠し通す神楽の2人は、

周囲をやキモキさせ続けていた程だった。

周囲は、誰もが2人のそれぞれの気持ちに気付いていた。

気付いていないのは当の本人達だけで…。

『いくら神楽がアタシのマネージャーだからって言ったって、行く行くは皇妃王になれるんだから。周囲だってみんな神楽様って呼んでるでしょ！。』

屈託の無い妃杏の笑顔に、神楽は思わず顔を赤くしてうつ向いた。

本来、男性であれば“皇王”であり、そのパートナーは“皇妃”なのだが、

妃杏は女性皇王の為、“皇王妃”となり、そのパートナーは“皇妃王”となる。

女性皇王は3代ぶりのコトで、しかもそのパートナーがエージェント上がりと言うコトもあり、国民の期待はかなりのモノがあった。

「おはようございます妃杏様、神楽様。妃杏様の今日のご予定は…」

妃杏のサブマネージャーの如月。

この如月、エージェント1年目のド新人なのだが、今や次期マネージャーと言う、超異例の大出世を果たした幸運な男である。

『ありがとう、如月。』

如月を見る妃杏の表情は、まるで子供の成長に目を細める母親のように見える。

妃杏と初めて会った頃の如月は、いかにもアカデミアを卒業したての知識でガチガチのアタマでつかちと言う印象で、如月ではなく神楽に絶対の信頼を寄せていた。

だが次第に、神楽とは違う信頼感を如月に抱くようになり、

神楽が、プラチナムストーンに導かれし妃杏の運命の相手だと気付いた後、異例中の異例とも言うべき見習いの如月をサブマネージャーに抜擢したのは、

神楽と妃杏、2人共通の意見だった。

神楽もまた、以前から部下の如月を信用していた。

如月が部下として来た時から自分でやれば済むコトでも、“如月の評価の為に”とわざわざ如月にやらせたりして、気配りも忘れず、アカデミアでの様子をbossから聞いて、自ら如月を引き受けた程だった。

（当の本人は知らない。）

『如月にまた叱られますよ？“皇妃王様らしくなさって下さい！”って！！』

如月の最近の口癖を引用する妃杏。

またしても反論出来ない神楽。

普段のマネージャーとしての立場であれば容赦なく反論する神楽なのだが、

“皇妃王”としては、てんで弱くなってしまうのである。

実質的に妃杏の方が立場が上なので、弱くなってしまうのはどうしても仕方無いコトなのだが…。

確かに神楽は、常に如月から口煩く“皇妃王様らしくお振る舞い下さい”と言われ続けている。

とは言え、所詮相手は自分の部下。

その度に如月には強く出て、“オレはまだあくまでも妃杏様の婚約者だ！まだ皇妃王では無い！！”と反論しているのだが。

「まあ、神楽様は妃杏様にお仕えしたい一心でここまで来たお方ですから、仕方ありませんよね。」

如月は誰よりも先に、2人のそれぞれの気持ちに気付いていた。

神楽の性格も、妃杏の性格も、誰よりも理解している自信が如月にはあった。

自分が神楽と妃杏の肝煎りでサブマネージャーになれたのも、本音は何にも代えがたい程の喜びだったが、

“「神楽様がマネージャーで居られると言つのにそれでもサブに就きたい奇特な方なんていませんよ!!」”

と、上司の神楽に食って掛かる程、如月もまた神楽に信頼を置いている。

“「オレはまだマネージャーだ!!オマエで十分だ」”

神楽もまた、譲る気配は微塵も無かった。

だが妃杏本人は1日も早く神楽に、今までの“皇女としての妃杏様”から、“パートナーとしての妃杏様”として接して欲しいと言う点からも、本音では今すぐにでも神楽にマネージャーを外れてもらい、如月がマネージャーになって欲しいのだが、、

現時点ですでに、ほとんどのマネージャー業務は如月が行っている。

如月も妃杏も、中途半端なコトが嫌いな神楽の性格を知っているからこそ、“「そろそろマネージャーに…」”なんてコトは言えない

でいた。

「別にワタクシ個人としては、マネージャーだろうがサブマネージャーだろうがどっちでもイイんです。」

妃杏と2人の時間、時折如月はサラッと笑い飛ばしながら言う。

如月は、まだ神楽が自分のチーフだった以前から良く言っていたコトバがある。

“ 妃杏様がいてチーフがいてワタクシがいる。怖いものナシですね。”

このコトバを初めて聞いた時は、“ 何て自意識過剰なヤツなんだ？ ” と思ってしまうていた妃杏だったが、

その後何度となくこのコトバに救われてきた。

何かあることにこのコトバと言った時の如月の笑顔が甦ってくるのだった。

「ワタクシは、妃杏様も神楽様もお2人とも大好きですから、お2人のそばにいらればポジションなんて何でもイイんです！」

これもまた、如月の口癖の1つだった。

「神楽様がワタクシに妃杏様をお迎えに行かせてくれてなかったら、妃杏様があの時神楽様やbossに直談判して下さらなかったら、今ココにワタクシはおりませんからね。」

如月には、神楽に対しても妃杏に対してもアタマが上がらない理由がある。

だがそれが、如月が2人に絶大の信頼を置いている理由でもある。

『あの時はイマイチ訳が分からないまま、完全なまでの同情であんなコト口にしちゃってたケド、今は言っというて良かったと思ってるよ。』

妃杏の表情に、嘘は無かった。

まだアカデミアを出てすぐの頃、アカデミアを首席で卒業した如月は、自分に絶対の自信があった。

見習いの分際で、上司の神楽に何の断りもなく勝手な行動を取った為に、アカデミアに出戻りする寸前まで行った如月だったが、

妃杏の恩情で、かろうじて出戻りは免れたと言う過去がある。

如月のフォローと妃杏の恩情、

どちらか1つでも欠けていたら、今頃如月はエージェントすら続けていらなかったに違いない。

ある意味、神楽にとっても如月にとっても、妃杏は“命の恩人”なのである。

と言っても、当の本人は全くそんな気は無いのだが。

「仕方無いとは言え、神楽様も困ったモノですね。」

苦笑いの如月。

『アタシの悩みなんて神楽は気付かないよね…。』

妃杏も苦笑い。

妃杏は未だにある悩みがある。

その解消法として、神楽に対して“神楽様”と呼ぶようにしているのだが、そんなコトとは神楽はつゆしらず…。

“「お止め下さい」”と言っばかり。

「ご結婚なされば変わりますよ。」

優しく微笑む如月だが、イマイチ妃杏は腑に落ちなかった。

『結婚・・・、かあ。』

妃杏の視線は遠い未来を見ているようだった。

神楽との未来……

妃杏は空を見上げていた。

アタシが肌身離さず身に付けているプラチナムストーン。

この琉冠星の守護石でもある。

この石は皇位継承者だけが持つコトを許され、持つ者によって違った力を発揮する不思議な石なのだ。

自分が産まれた時から身に付けているから、取り立てて“特別なモノ”と言う意識は今まで全く無くて。

むしろアタシは“御守り”だと思っていた。

そのくらい自然な存在だった――

この石の正体を知るまでは……

アタシは3歳になったその日から17歳になる寸前までの約14年間、2世紀前の地球で過ごしていた。

何かの衝撃で出来た時空間の歪みが原因らしいんだけど、その時の衝撃でそれまでの記憶まで亡くしちゃって、

アタシは孤児として施設で少しの間育ち、その後神崎妃杏として神

崎家の養女として幸せに暮らしていた。

あの満月の夜までは――

その何日か前から前兆じみたモノはあったけど、決定的だったのはある満月の夜で。

アタシの潜在意識に如月が入り込んで来た。

そこで明かされたのがアタシの正体。

まさに“青天の霹靂”

だった……

何となく自分が、“普通じゃない”コトは気付いていた。

その理由の一番は、やっぱり、このストーン。

アタシ以外の人にはこの石が見えなかったの。

嘘みたいだけど、ホントの話。

養父母の神崎夫妻にも、幼い頃からの付き合いの親友にも、最初にお世話になった養護施設の先生にも、アタシを施設に連れて行って

くれた厚生員さんも。

だからこの石の正体を調べようにも、自分一人で調べるしかなくて、パワーストーンのお店に行っても見えないモノは答えられるワケもなく。

でも不思議と、怖がったり気味悪がったりするのは無かった。

アタシ、施設に行くまでの記憶がまるで亡くなっていて、自分の名前・誕生日以外のコトは何も覚えていなかったの。

どこから来たのかとか、どうやって来たのかとか、どうして1人なのかとか、両親の名前とか。

それでいてわずか3歳でピアノが弾けてて、よく施設でキーボードを弾いてた。

ソレがきっかけで、ピアノ講師の神崎ママがアタシを養女につて迎えてくれたんだけどね。

如月がアタシの潜在意識の中で明かした衝撃の真実 - - - - -

それは、

アタシは2世紀未来の“琉冠星”と言う惑星の皇女で、しかも皇位継承者だって言う、何ともハチャメチャな真実だった。。。

その時はもちろん全く信じられなかったけど、そう言われて見れば思い当たるフシってモノが次から次へと出てきて、

如月が来ていた服の胸ポケットにあった、刺繍のエンブレムがアタシが施設に連れて行かれた時に来ていたワンピースの刺繍と同じだったコトや、

言ってるのは神崎ママじゃないってのは分かってたけど、なぜか耳に焼き付いているコトバがあって。

ストーンの、“この石は命と同じくらい大事なモノ”ってのもう1つ、

“困っている人を助けるのがアナタの役目”

その2つの意味も、アタシの正体が分かって、やっと繋がった気がした。

しまいには、誰にも見えていなかったペンダントのストーンが、如月には見えていて…。

“「そのストーンがこの地球に存在しないモノだからです」”

なんて言われて。

さらに如月の話の影響で、その日から言うモノ、今まで一切出てこなかった幼い頃の記憶が脳裏に残像として甦ってきたり、

レジスタニアって言う、琉冠星の反国家組織に狙われてアタシが存在していた事実がレジスタニアのせいで消えちゃったり、

如月に言われた通りに、心の中で如月を何度も何度も強く呼んだら何故かその上司の神楽が現れたり。

でもその時に、アタシの失われていた記憶が完全に覚醒しちゃって、アタシは抗えない現実には、見事に打ちのめされたのだった。。。

それから言うモノ、改めてこの石と向き合うコトになったのだが、unbelievableさは益々パワーアップし、

それでもやっぱり不気味さや恐怖心は一向に起きなかったけど、ただただ驚き続けるばかりで。

でもこのストーンは、ホントにアタシを護ってくれてるってコトを痛感させてくれた。

自分の正体が分かるまでの十数年、今思えば一切危険な目に遭わなかったのはストーンのお陰だったのかなって思えたり、

レジスタニアから何度も護ってくれたり、

ハタから見たら、“男性恐怖症”かって親友の璃音が心配する程男性を真剣に好きになるがコト無かったのも、ストーンのパワーだったり。

何でもこのパワー、同じストーンでも、持つ人によって発揮されるパワーが異なるらしく。

代々の皇王に共通するパワーが幾つかあって、その中に、

“ 想う人が現れた時、その人が運命の相手 ”

なんてのもあって。

結婚相手を見極める力も、この石にはあるのだ。

でもねえ、、、

そのお陰で “ 異性と付き合う ” コトがどういうコトなのか解らなくて、ハードに大変だったんだ。。

ましてやアタシのその “ 運命の相手 ” は、すぐそばにいる人だったから。

そう、、

エージェントの神楽。

アタシはそれまでずっと、勝手に “ 神楽はあくまでも後継者としてしかアタシを見ていない ” って思い込んでいて、

神楽に対する特別な気持ちを持っていたにも関わらず、自分で無理矢理抑え込んでいた。

まさかその気持ち、ストーンの力だなんて知るハズ無かったから。

未だにこのストーンの力は、未知数。

持っているアタシはもちろん、アタシよりストーンとの付き合いが長いお父様やお爺様ですら、完全には分からない。

それがこの、プラチナムストーン。

この琉冠星の守護神。

この琉冠星の、プラチナムマウンテンにしかない鉱石である。

く第1章く時を超えて

ある日の夜。

アタシはいつものように1人ベランダで空を眺めていた。

今日は満月。

地球でもしよっちゅうこんな感じでよく空を眺めてたななんてふけてみたりして。

時々地球でのコト思い出しちゃうんだよね。

仕方無いよね。

でも何百年も昔のコトなんだよね。

アタシや浦島太郎だよ。

璃音との日々、神崎家でのコト、神楽と如月が来てからのコト。

何もかもが昨日のコトのよう。

如月や神楽に“妃杏様”なんて未だかつて言われた試しのない言い方されて戸惑ったり、時には苛立ったり…。

考えてみれば出逢った時から“妃杏様”だもん、なかなか同等になんか見れないよ、神楽のコト。。。

何とか頑張つて同等に接しようと、アタシなりに必死で考えて今は神楽に敬語で接してみてるケド。

初めて神楽に逢った時、分かんなくて敬語遣つてたら超が付く真顔で“「敬語はお止め下さい」”って言われたケド、今はテレて“「お止め下さい。」”って言う程度…。

出逢った時には既に主従関係にあつた2人が、今や婚約者だもんなあ。

かたや神楽は幼い時の恩ダケでアタシに仕えるコトダケを目標に、今まで生きて来たオトコ。

如月も神楽も初めてアタシの前に現れた時からアタシのコトは“皇位継承者”だもんね。

アタシも“「妃杏様」”呼ばわりされて初めは戸惑つたけど、段々その気になってきてたし。

そんな関係のアタシと神楽が“フツの恋人同士”になれる日なんてくるんだろうか。

空を見上げながら、ふと考える。

出るのはため息ばかり。

空にはキレイな満月なのにな。。。

「妃杏！」

ん？

モニターを見るとモニターには、お隣のサルミナ星のルアナ皇女がいた。

『どうしたんですか？皇女。』

ルアナ皇女はアタシの3つ上。

実は如月がお慕いするお相手。

まあココだけの話なんだけどね。

背が高くてスタイルは抜群で頭脳明晰。

歯に衣着せぬ物言いで、良く周りから注意されてるらしいけど、本人は全く気にしてない様子。

裏表ない性格だから信頼は物凄くある。

アタシにとってお母様の次に尊敬する女性。

何と無くだけど、璃音みたいなカンジで、なおさら親近感が湧くんだよね。

「アンタんとコのウルトラスーパーハイパーエクセレントスペシャルブレインとbossに用があるんだけど今大丈夫かなあ。」

……ルアナさん??????

2度同じ言い方出来んのかなあ。

どんだけくつつけんだよ。

よくもまあ出て来るねえ。

ちよっぴり呆れる。

ちなみにたぶん神楽のコトだと思う。

でもなんだろbossと神楽に用なんて。

『確認してみます。お待ち下さい。』

アタシはモニターを切り替えてbossと神楽それぞれに聞いてみた。

「かしこまりました。皇女直々の御用とあらばお断りは出来ません。すぐに準備致します。」

2人とも即答だった。

アタシはすぐさまモニターを再び切り替えてルアナ皇女に伝えた。

「ありがとう助かるわ。今から行くから妃杏のroomでイイ？」

えっ!?

『アタシも宜しいのですか?』

「アンタにも聞いて欲しいのよ。」

何だろ、胸騒ぎがする…。

ルアナ皇女のこんな顔見たコトないよ。

「分かりました。お待ちしております。」

アタシの部屋でと言うコトを2人に伝え終わるか終わらないかのうちに、ルアナ皇女がルアナ皇女のSPを連れて現れた。

『早つつつつ。』

つい低い声で呟いてしまった。

「琉冠星はいいねえ。アタシも移住しよっかなあ。」

??????????

いきなりの衝撃発言。

「ルアナ様！」

SPのマールスさんにたしなめられてる。

皇女らしいっちゃあ皇女らしいわな。

一足先に現れたのはbossだった。

「失礼致します。」

『どうぞ。』

「いらっしゃいませルアナ皇女。わざわざお越し頂き恐縮です。」

bossはルアナ皇女に向かって“エージェントの最敬礼”である、“跪いて一礼”をした。

「ごきげんよう神楽さん。気にしないで、アタシが来たかっただけだから。ちよっと自分のトコじゃ言いづらかったから。」

益々胸騒ぎ。

「失礼致します。」

遅れて神楽登場。

案の定コーヒー持参で。

さすが“かゆいトコロに手が届くオトコ”ね。

それにしても如月逢いたいだろうなあ。

「そう言えばもう1人は？」

ルアナ皇女は部屋を見渡している。

おっ！

「如月も同席して宜しいのですか？」

心の中はニヤケてる。

表情は至って冷静に。

「妃杏のエージェントなんだから。」

「恐れ入ります。」

なぜかboss。

bossが如月を呼んでくれた。

如月の喜ぶ顔、見たかったな…。

まさかそのまま来ないよねえ。

「失礼致します。」

さすがに冷静に登場。

内心ひと安心。

如月の気持ちはアタシしか知らないから。

神楽やbossが聞いたらきつと“立場をわきましろ!!”って怒鳴られるだろうからアタシからも言わないし。

だけど神楽も如月もやっぱり“ルアナ皇女は璃音様みたいですね”って良く言ってる。

だから如月がホレるのかなって思ってみたりして。

「ごきげんいかがですかルアナ様。」

この如月の嬉しそうな顔ったらありゃしない。

見てるこっちが照れちゃうよ。

「ところでさあ……」

急に表情を変えた皇女にウチらも緊張する。

「アタシさあ、、、」

言いづらそうな皇女。

思わず息をのむ。

皇女はゆっくり、言葉を選ぶように話してくれた。

何でも皇女の言うコトには、サルミナ星に異変が起きてるんだけど誰にも信じてもらえなくて困っているとのコト。

皇女は、確実にサルミナ星の自然が侵され始めているとみんなに訴えているらしい。

そこでみんなに信じてもらうべく、ウチらにリサーチを依頼したいとのコトだった。

当然ウチらの意見は一致。

“隣の惑星であるサルミナ星の危機は琉冠星の危機も同然。何らかの影響も考えられるから当然お請け致します。”

皇女は物凄く嬉しそうに応えてくれた。

「皆様のお力を借りなければならぬコトは大変情けなく思います。申し訳ありません。」

マールスさんが深々とアタマを下げた。

早速作戦会議が行われた。

もちろんこの5人だけの秘密。

だからいくらなんでもそんな頻繁にお互い往き来出来ないから、神楽と如月とbossのウルトラスーパー何とかブレインを最大限に駆使してサルミナ星の状況を逐一チェック出来るシステムを開発するコトに。

まあこの3人に掛ければ探査衛星の1つや2つ、モノの数分で出来ちゃうんだろうけど。

．．．．出来たらしい。

「次は解析プログラムですね。」

つくづく感心ダワホントに…。

「ホントスゴいね。」

皇女もマールスさんも驚愕の様子。

2人が帰ってからプログラミングは続いたけど、コレもやっぱりわずか数分で出来上がったのだった…。

アタシはただただ見ているだけで。

もちろん5人以外にはバレないように気を張らないとイケない。

ソコが難点と言えば難点。

一応、こっちでコントロール出来るようにはなってるけどね。

「皇女の名誉の為に何とか解決しないとイケませんね!」

張り切る如月。

アタシは1人ヒヤヒヤしていた。

“んなコト言ったらbossや神楽にバレちゃうでしょ”

って。

「お前皇女に好意があるのか?」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

だから言わんこっちゃない。。。

鋭いbossのツツコミに、アタシは思わず口に含んでいたコーヒ
ーを吹き出しそうになった。

如月を見る神楽の視線が怖かった。

数日後・・・

アタシは如月とサルミナ星に来ていた。

名目は皇女に逢いに。

実際は、リサーチ。

データベースにはない性質の物体が検出されたから。

とりあえず皇女のご家族にご挨拶。

サルミナ星のロイヤルファミリー。

サルミナ星は男女問わず一番上が継承するしきたり。

皇女には継承権はない。

だから余計に如月は好意を寄せている。

継承者のシユナ皇子は超イケメン。

全国民の憧れの的。

お妃は誰がなるのが最大の関心事みたい。

まあもちろんそれなりの方がなるんだらうけど。

だからルアナ皇女ももちろんかなりの美人。

ルアナ皇女もどんな人と結婚するのか皇子程じゃないにしても注目されてるらしい。

だから余計に如月は気後れしてんのよね。

まさに“高嶺の華”。

アタシは応援してるよ!!。

如月はいつでもアタシを応援してくれてるもん。

「ごきげんよう皇子様。」

300%の力で“よそゆき妃杏”スマイル。

お母様にこれでもかってくらい叩き込まれたからね。

“国民の前”用と、“よそゆき（来賓等）”用と。

最初はノイローゼになりかけたけど今じゃすっかりフツーに出ちやうよ。

「ようこそ妃杏様。」

カッコイイわぁ皇子。

そりゃ全国民の憧れの的にもなるよ。

イヤ！？浮気じゃないよ。

浮気はしませんよ？

“カッコイイ” たって、やっぱりココでもときめくワケではないんだな、コレが…。

プラチナムストーン恐るべしだよ。

他のご家族にも挨拶を済ませ、自然な流れで皇女の御部屋へ。

さっそく本題に入ろうとしたその瞬間、マールスさんが何やら反応した。

「ですが今は妃杏様が…」

マールスさんの困惑顔が。

「ガイル？」

今度はぶっきらぼうな皇女が。

ガイル????

如月と顔を見合わせる。

「追っ払ってよ。」

皇女のすんごい態度。

今までこんな皇女見たコト無いワ。

「婚約者としてキミの交友関係は知っておく必要があるだろ。」

ガイル????

“婚約者”！？

皇女の顔が一気に変わった。

「ガイル様」

マールスさんが制止しようとするのを振り切りガイルはアタシ達の前に立った。

「初めまして、ガイルと申します。」

何ともジェントルマンな人じゃないのよ。

ご挨拶がいかにもどこかのご子息様ってカンジだわ。

『初めまして。琉冠星の妃杏と申します。隣はエージェントの如月です。』

如月の顔が見れない…。

「挨拶なんかしないでイイワよ妃杏。」

どんどん皇女の顔が恐ろしくなっていく。

どうみてもガイルは皇女に嫌われてるワね。

「ボクは婚約者として挨拶してるんだ。」

如月のコトを思うと、“婚約者”なんて聞くとアタシまでドキドキしちゃうよ。

「婚約者だなんて誰も認めてないわよ。アンタが勝手に言ってるだけでしょ？ だいたい勝手に人のroomに入ってきて来ないでよ。」

皇女の機嫌の悪さはどうみてもとくにMAXを振り切っていた。

「マールス様、どういふコトですか？」

うわああああ…。

如月の声が上ずっている。

「ボクと皇女はお互いのお祖父様が決めたフィアンセなんだ。皇女は次期王妃なんだよ。」

アタシも如月も絶句した。

するしかなかった。

「それはとつくに時効だって言ってるハズよ。」

皇女は全くガイルと目を合わせようとしない。

皇女の顔から笑顔が消えてどのくらいだろう…。

何だか背後から殺気だったモノすら感じる。

「皇女の交友関係が分かったところで、ボクは失礼するよ。妃杏様、また。」

さりげなくガイルは帰って行った。

「二度と来るな！」

やっとガイルの方を見た皇女はガイルの背中に向かって吐き捨てた。

大きくため息をつく皇女。

しばしの沈黙。

後ろを振り向けない。

沈黙を破ったのはマールスさんだった。

「ガイル様はイグアス星の王子でして、その昔ルアナ様のお祖父様のランズ皇大王様の代に我が星はイグアス星に攻められまして、その時に停戦の条件として、“いずれ生まれてくる女子を我が国の王

子の婚約者として迎え入れる” ってのを提示されたのです。」

そんな…。

『それって人質じゃない！いつの時代の話よ。』

中学高校の日本史じゃないのよ？

「だからアタシは時効だつて言つてんのよ。」

落ち着きを取り戻した皇女、表情もいくらか落ち着いている。

それにしてもずっと無言の如月が気になる。

ホントは叫びたいハズ。

暴れたいハズ。

今すぐに皇女に駆け寄りたいたハズ。

だけど如月は毅然とした態度でアタシの後ろにいる。

如月のコト思つたら泣けてきちゃうよ。

この恋、何とかならないモノかなあ。

く第2章く時の迷子

『ごめんなさい、今日は帰ります。またにします。』

アタシはいるに耐えなくなって、用件を済ませずに帰った。

「妃杏様？」

怪訝そうな如月の表情が依然として見られなかった。

皇女もマールスさんもそして如月も、啞然としていたけど、アタシは構わずその場を去った。

毅然とした態度の如月を見れば見るほどに辛くなるから、今日はこれ以上いたくなかった。

「ごめんね妃杏…。」

啞然としたままの皇女。

「妃杏様？」

如月が何度も呼び止めようとする。

如月の声が胸に響く。

自然と涙が込み上げてくる。

「妃杏様？」

『今日はもういいわ。神楽と話がしたいから。お疲れ様。』

やっぱり如月の顔を見ずに。

「かしこまりました。では呼んで参ります。本日も1日お疲れ様で御座いました、失礼致します。」

背後に如月を感じなくなった途端、アタシは洪水のように泣きじゃくった。

久し振りにこんなに泣いてる。

苦しいくらいに泣いてる。

今までも今でも如月はずっとウチらのコトを応援してくれていた。

“お2人とも大好きです。お2人には幸せになってもらいたいだけです。”

そう言う時の如月の笑顔がアタシの脳裏に焼き付いている。

ソレが余計にツライ。

今如月はどうしているだろうか。

1人何を思っているだろうか。早く如月を“任務”から解放してあげたかったから。

ダメだ、泣きすぎて肩がヒクヒクしている。

ひゃっ！！！！！！！！！！

神樂？

そつと優しく抱き締めてくれている。

しかもコーヒーの香りが。

神楽様？

声にならない声。

かなりかすれてる。

「どうなさったのですか？如月に聞いて驚きました。皇女のトコロへ行っていくらも経ってないではないですか。」

神楽の聲がちよつと怖く感じた。

アタシは神樂の方を向き直し、涙でぐしゃぐしゃな顔で神樂に抱き付いた。

ひとしきり神楽の胸で泣いた後、アタシはコーヒーを何口か飲んだ。

その間神樂はずっと何も言わずに、とてつもなく優しく抱き締めてくれていた。

コーヒーを飲んで落ち着いたら、あの時のコトを思い出しちゃった。こっちに来て間もなく、アタシの誕生日の前夜、お父様がアタシの部屋に来て、しかもわざと神楽まで呼んで突然プラチナムストーンの話をし出したの。

“想う相手はいるのか”なんて、突飛もないコト言い出して。

突然何を言い出すのかと、心臓が握り潰されたような感覚だった。

神楽に対しての気持ちで一番悩んだ時で、しかもその直前にどうしていいか分かんなくなつて神楽に八つ当たりしちゃってたから、思わずとっさに神楽の目の前で“いないです”なんてウソついて。

“プラチナムストーンは持つ者によって発揮されるパワーが異なるケド、歴代の皇王が皆経験してるコトがある。”

そう言つて、続けたコトバにアタシも神楽も絶句したんだよな。

“想う相手が現れた時、その人が妃杏の運命の、自分にとってのオンリーワンの相手と言うコトのようだ”

アタシは目の前が真っ暗になって、何トンもの衝撃を受けた気がした。

神楽は、見た目は冷静だった。

ところが後から如月がすっ飛んできて、アタシにかみついて。

如月は一番最初にアタシと神楽のお互いの気持ちに気付いてた。

その時からずっと未だに如月はウチらのコトを応援してくれている。

あの時、神楽は言ったよね。

“アタシと誰かが一緒になるのかと思ったら、とたんに自分の感情をコントロール出来なくなっていた”

って。

冷静沈着な神楽がそうなんだもん、如月は??

どうにかしてあげたい。

どうしたらイイの???

とりあえず皇女の話をしてみた。

もちろん如月のコトは出さずにね。

皇女とガイルの話。

さすがの神楽も驚いたみたい。

『あんな嫌がる皇女、見たコト無い!!あんな皇女見たくないよ!
!どうにかならない?』

タメ口に戻ってしまっていた。

でもそんなの気にしてる場合じゃなかった。

『イグアス星がサルミナ星に攻め込む前にタイムトリップして阻止出来ない？』

ふとアタマに過った。

黙って首を横に振る神楽。

『どうして？神楽様や如月がアタシのところに来れたように出来ないの？』

アタシ、自分で相当ムチャクチャなコト言ってるのは分かってた。

2人が2世紀も過去の、しかも違う惑星のアタシのところに来れたのは、プラチナムストーンのお陰だってコトは分かってる。

『何でもかんでも技術が進歩していて何だって出来ちゃうのにどうして時空間移動は出来ないの？』

取り乱すアタシに、神楽はどうしてイイか困惑気味。

コレだって分かってるよ。

どうして時空間移動は出来ないか。

過去にそういう技術はあった。

当たり前前に過去に行き来出来る技術が。

「他の方法を考えましょう。」

神楽はアタシが取り乱しているだけなコトをお見通しみたいだ。

過去に言っ て未来を変えようとしても所詮それは出来ない。

過去に戻っ てどうこうしたくらいじゃ未来は変えられない。

その瞬間は変わっ ても、どこかで上手く帳尻が合っ ちゃっ て結局は何も変わらない。

もしくは、タイムトラップと言っ “歴史の歪み” が出来てしまっ 、
そんなうちに過去から戻っ て来れなくなる。

そんな“時の迷子” が問題になっ て、結局それ以上技術は進歩しな
いまま。

未だに戻っ てこれない“時の迷子” はたくさんいる。

だけど…

『神楽様や如月のブレインだっ たら何とかならないの？』

アタシは無我夢中だっ た。

とにかく如月を助けたくて。

“如月はもしかしたら望んでないかも知れない”

心の片隅ではそう思えっ てるよ。

だけど、この衝動は止められなかった。

どうしようもなく。

また涙が…。

うつ向いたアタシを神楽がそっと包んで言った。

「如月の為ですね？」

!!!!!!!!!!!!!!

思わずカラダが反ってしまった。

思いつきり眉間にシワを寄せて、口元もつり上がって、アタシ変な顔。

神楽はとんでもなく優しい笑顔。

「人間、自分のコトにはとことん鈍感ですが人のコトにはとことん敏感なようです。本来であれば上司として“立場をわきまえろ！！”と怒鳴り付けたいトコロですが、なにぶんワタクシが言える筋合いではございませんので。」

含み笑いを見せながら神楽は優しい笑顔のままですう言った。

それを聞いたらアタシ、また泣けてきちゃって。

神楽の胸で泣いちゃったよ、本日2回目。。。。

「ワタクシとしても如月の幸せは願わずにはいられません。」

神楽・・・。

オトコの友情ってヤツかなあ。

アタシは今更ながら、改めて神楽のスゴさを感じた。

…と言うより、ちょっと誤解してたみたい。

神楽のコトだから如月にはメチャクチャ厳しいのかと思ってたから。

神楽が如月の想いに気付いてたってコトと、

“部下として”だけじゃなく、“オトコとして”も如月を見ていたってコト。

正直意外だワ。

ごめんね神楽。

パートナーのコト解って無いのは、アタシの方だったよ。

心の中で反省。。。

「如月の様子を見て参ります。くれぐれもワタクシが気付いているコトは黙っていて下さいね。」

ほくそ笑みを浮かべながら神楽は如月の元へ行った。

何だか神楽のこんな一面、見たコト無かったからちよっぴり嬉しい。
心なしかコーフンしてる。

尚更何とかしないと……！

イイ加減、如月に日頃の恩返しをしないとね。

まずはやっぱり皇女が言う異変を突き止めないとね。

って、その為に行ったのに帰ってきたのは誰だよってハナシだけど
ね。

「妃杏、ごめんね。」

皇女だ。

モニター越しに。

『アタシこそ申し訳ありません。用件があつて行ったのはワタクシ
の方でしたのに。』

皇女は謝るコトないよ……、悪いのはアタシなんだから。

『データベースにはない性質の物体が検出されました。それについ
てお話しようと思ったんです。』

「アイツだよ……やっぱりね。」

なぬっ?????

アタシのコトバを最後まで聞くか聞かないかで皇女は眉間にシワを寄せて、一言そう言った。

“アイツ” ってまさか？

「ガイルがアタシに有無を言わさないように何か仕掛けてんだよきつと！！だから誰もアタシの言ってるコト真に受けてくれないんだと思うのアタシ。」

アタシは何も言い返せなかった。

皇女の言ってるコトが皇女の推測に過ぎなくても、確かに言ってるコトは納得できるから。

だから、うかつに“まさか…”とも、“そうですよ”とも言えない。

だけど、そんなコトで自分の惑星の危機を見てみぬふりなんてするのだろうか。

そんな疑問もある。

イグアス星に行ってみる？

何用で？

お父様やお祖父様、イグアス星に用ないかな。

イヤ！！！！あつたトコロでまさかお父様やお祖父様に何かを頼むなんて出来るワケないじゃない。

じゃあどうすれば…。

マールスさんだっつっ！！

マールスさんなら1人で行っても不自然じゃないよ。

・・・だから何用で??

ダメだ、早くも行き詰まってしまった。

速すぎだろアタシ…。

仕方無い、ウルトラスーパーハイパーエグゼクティブブレイン（間違いなく毎回同じようには言えてないな、アタシ。）に頼んで作ってもらうか。

バレないような、超小型無人解析システムを。

「アタシはアタシの意思で自由に相手を選びたいの。だいたい王妃なんかやりたくないよ。ガイルみたいななのタイプじゃないし。」

皇女の表情が、“嫌々オーラ”を爆発させていた。

『皇女は想う方はいらっしやるのですか?』

アタシは尋常じゃない程にドキドキしながら尋ねた。

アタシのドキドキとは裏腹に、皇女はあっけらかんと答えた。

「たくさんいて1人に絞れないかな。」

でも、とってもステキな笑顔だった。

ちよっぴり羨ましかった。

アタシは“1人に絞れない”なんて経験ないからね。

その“たくさん”の中に、如月はいてくれるのかなあ。

もしくは、今からでもその中に入れる余裕、あるかなあ。

聞きたい。

だけどやっぱり聞けなかった。

あまり如月の知らないところで暴走するのも厳禁だしね。

皇女との会話が終わったあと、アタシは無意識にぼんやり空を眺めていた。

何を想うワケでもなかったけど。

ガイルがいた時の皇女の顔と、

さっきの、楽しそうに話す皇女の顔が同時に浮かんで、離れなくて。

どうしたらいいんだろう。

ホントにガイルの仕業だとしたら…。

おっ！！！！この香りは！！！！！！

「失礼致します。」

神楽登場。

『如月はどうでしたか？』

コーヒーを笑顔で受け取る。

「ワタクシには平静を装っております。サルミナ星のコトとイグアス星のコトを2人で少し調べておりました。」

どんだけ耐えてんだよ。

皇女のコト好きじゃないのか？

それとも諦めた？

『今皇女と話してたのですが、アタシがデータベースにはない性質の物体が検出されたって言ったら、皇女はサルミナ星の異変はガイルの仕業だって言っていました。だから周りのみんなはみんな信じてくれないんだって。』

アタシの話に神楽が反応した。

「皇女の発言に根拠は無いにしても、まんざら疑うワケにもいきませんね。」

アタシと同じコト言ってるよ。

「イグアス星を調べる必要がありますね。」

神妙な顔で言った。

アタシもつられて神妙な顔で頷いた。

その後bossに話し、如月にはあえて言わずに3人で（毎度のコトながらアタシはいるだけだけど）システム 作りをした。

もちろんbossに如月のコトは言わないよ。

いくらなんでも言えないよ…。

でも如月、大丈夫かなあ。

神楽が気付いてるコト、言っちゃった方が如月的にはラクなんだろうに…。

まあそこは男同士のコトだからタッチしない方がいいね。

「おはようございます妃杏様。」

今朝の如月は・・・

いつも通りだった。

『アタシの前では無理しなくていいんだよ。』

言わずにはいられないよ。

「妃杏様…。」

ほんのり情けない顔になる如月。

「お気遣いありがとうございます。ですが大丈夫です。やはり身分違いだと言うコトを痛感させられましたから。」

『何言ってるの！？アンタの想いつてそんなモンだったの！？』

自分が一番驚きだった。

如月のコトバの後、無意識に叫んでいた。

そこには理性も何も無かった。

ホントに口が先だった。

ポー然とする如月。

『ホンキで“身分違い”だなんて思ってるの！？』

止まらなかった。

アタマの片隅では如月が望んでないかも知れないって思ってた。

だけど如月の言ってるコトが本意じゃないって、何となく察したから。

「妃杏様？」

戸惑う如月。

そりゃそーだよな。

落ち着けアタシ。

大きく深呼吸。

『アタシは如月には幸せになってもらいたいの。だから無理しないで。簡単に諦めたりしないで。』

一息ついたハズなのに涙がにじんでいた。

「もちろんショックでした。ですがワタクシにどうにか出来る次元の問題ではありません。」

如月のショックはアタシの想像をはるかに越えていたようだ。

怒りを通り越して諦めに変わっていたのだ。

アタシは食事の間、ずっと考えていた。

そして食事の後、みんなのいる前で告げた。

『しばらく如月に休暇を取らせたいのですがよろしいでしょうか。』

「妃杏様???」

すつとんきような声をあげる如月。

如月が驚いているからか、一瞬ためらったように見えたお父様だったケド、優しく答えてくれた。

「イイだろう。朱雀、構わんな?」

「かしこまりました。調整致します。」

bossも穏やかな表情で答えてくれた。

心の中でホッと胸を撫で下ろす。

「妃杏様???」

狼狽える如月だったケド、察した神楽が如月の肩を叩いて言ってくれた。

「妃杏様がそう仰るんだ。有難くお受けしろ。オレに任せろ。」

神楽もまた、優しい笑顔だった。

ありがとう、神楽。

神楽の目を見て呟いた。

神楽はそつと笑顔で頷いてくれた。

少しでも、のんびりしてくればイイかなって。

やっぱり任務から解放してあげたいから。

「何ですか？」

神楽に言われたにも関わらず納得行かない如月。

部屋に戻ってすぐ噛みついてきた。

『たまにはのんびりしなよ。』

あえてソレだけしか言わなかった。

「・・・かしこまりました。」

全く納得してないカンジだったケド、
渋々如月はふてくされながら
出ていった。

“ 自分を見つめ直す ”

なんて偉そうなコトは思わないケド、
リフレッシュしてくれたらな
って思ったから。

如月がない方がスムーズに済むコトもあるしね。

ちよつと違つけど、神楽とゆつくり（？）2人の時間が出るしね。

「久し振りに、よろしくお願い致します。」

何だか照れ臭い。

神楽も照れながら挨拶。

不思議な空気が2人を包んでいた。

「第3章」愛は時間をこえて???

如月に休みをあげて数日。

神楽と2人きりの日々が何だかモーレッツに照れ臭い。

婚約者なのにアタシのエージェント。

とっても変なカンジ。

神楽が婚約者になってからは、ずっと如月が神楽の代わりに色々やってくれてたから。

b o s sと神楽で作ったシステムは、今イグアス星に滞在中。

透明で超小型だからバレない。

いくら技術の進歩とは言え、スペースシャトルとか探索衛星がこんなに小さくなっちゃうんだから、進化って凄いよね。

しかもエンジンも何も無くて。

コレをアタシがいた時代の地球の人達が見たらどう思っただろう。

2人の開発したシステムは、この前の“サルミナ星に存在しない性質の物体”を解析するためのモノ。

だからイグアス星の至るところに行けるようにプログラミングしてある。

後はこつちのコントロールブースで逐一チェックするだけ。

でも飛ばしてもう2日くらい経つのは何の結果も出ない。

あの物体：何で解析出来ないんだろう。

“「人為的に出来たモノでしょう。それにしても化合物が判明出来ないのも不思議です。」”

b o s s、かなり困窮してたっけ。

b o s sと神楽のブレインを持ってしても解析出来ないなんて。

“「念のため宇宙空間内にも幾つか同じモノを飛ばしておきます。」”

b o s sは用心に用心を重ねてくれた。

どうやら如月もあちこち探索に行ってるらしい。

如月のプログラミングテクニックは下手すりや神楽以上だからな。

でもアタシには1つ引っ掛かるコトがある。

コレで原因がホントにガイルだったとして、婚約破棄まで持っていけるのだろうか…。

ホントにサルミナ星のみんなが黙認してたとしたら、意味がないんじゃないだろうか。

って。

神楽に言っと、神楽は少し考えて答えた。

「確かにそうかも知れませんが、仮に過去に戻って攻め込むのを止めさせてもソレはソレで必ず婚約しないとは限りません。」

言い返せなかった。

“歴史のタイムラグ”だ。

アカデミアで習った。

だったらどうしたらイイんだろう。

『やるだけやってみようよ!』

もうそれしかなかった。

「妃杏様…。」

神楽の顔が複雑な顔になってる。

『神楽なら出来るでしょ？迷子にならないようにする方法。お願い
!!!』

もう“様”とか敬語とか完全に忘れていた。

とにかく懇願した。

神楽は黙り込んでいた。

「お時間を下さい。」

やっと発したと思ったたらそう言って出ていった。

アタシは裏庭にいた。

どうしてイイか分からず、プラチナムマウンテンに来ていた。

何をするわけでも無いケドただぼんやり。

「どうかしましたか？」

お母様だ。

後ろからお母様がやって来た。

『何でもありません。何となく来たくになりました。』

笑顔で応えたモノの、お母様にはバレていた。

「妃杏がココにいる時は何かあった時です。」

笑顔で言うお母様に、アタシはモノの見事にぐっの音も出なかった。

『もし、私が自分の意思にそぐわない方と、国の都合で婚約しなきゃいけなくなったらどうしますか？』

お母様を見ずに尋ねてみた。

「国の都合ですか…。ちょっと軽々しく言える内容ではありませんね。」

胸に何かが突き刺さった。

お母様の答えに。

「母として、娘の幸せは願わずにはられません。ですが、皇妃としては国の幸せも願わずにはられません。」

……ですよね。

そりゃそーですよね。

やっぱり過去を変えるしかないよね。

「サルミナ星のコトですね。」

エッ!?

とつさにお母様を見た。

「以前王妃から聞いたコトがあります。」

『そうでしたか。』

お母様が王妃様から聞いていたなんて知らなかった。

「王妃様も大変お心を痛めてお出で、私もお父様もそのコトは気に掛けております。」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

今確かにアタシの脳内で、“ガッン”と音がした。

『ご存知なんですか?』

耳を疑った。

「ガイル王子とのコトは存じております。」

うわわわ…。

『ではサルミナ星の異変のコトは?』

お母様の表情が変わった。

どうやらそれは知らないらしい。

「どうかしたのですか?」

アタシは瞬間的に感じて、お母様に話してみた。

“ 何とかなるかも知れない ” って。

結局お母様も巻き込むコトになっちゃったけど、お母様も boss 達と同じコト言ってくれた。

「サルミナ星の異変は琉冠星の異変も同然。」
って。

翌日、お母様はお母様のエージェントの雅さん^{みやび}とサルミナ星に出向き、異変のコトを然り気無く問い詰めてきてくれたようで、やはり気付いてはいるようだ。

だけど黙認するしかないのもまた現実で。

アタシはお母様の報告を涙ぐみながら聞くしかなかった。

イグアス星に問い詰めたトコロでどうなるモノでもないし、それこそまた戦争になんてなるワケにもいかないし。

ガイルもそんなに大事にするつもりはないだろうし、黙認するしかないのだと。

確かに今は宇宙協定があって、何があっても全宇宙内で争いは起きるってはいけないうって締結がある。

それを知った上でのガイルの行動。

許せない。

「くれぐれもヘンな気を起こしてはいけませんよ。」

ドキッッッッ！！！！！

胸が痛い…。

『はいお母様。』

とりあえず返事。

．．．その日の昼下がり。

「妃杏様！」

部屋で執務をしていたところに突然bossがモニターに現れた。

「化合物がようやく解析出来ました。やはり人為的に出来たモノのようです。」

神楽と目を合わせる。

送られてきたデータによると、初めて聞くものばかりだった。

「これじゃ時間が掛かりますよ。」

落胆の表情の神楽。

『boss、過去に行かせて！お願い。』

もういてもたってもいられないよ。

「私が行きます。」

エッ!?

如月の声…。

「昨夜、bossと如月と3人で話し合いました。話し合った結果、如月に過去に行かせます。」

神楽…。

「1人じゃ力不足なのは重々承知ですが、時の迷子にならない為に、こちらから逐一指示出来るように我々は残ります。もちろん妃杏様はお残り頂きます。」

boss…。

アタシはたまらずある場所へ移動した。

「妃杏様?」

神楽の声に耳を貸さず、着いたのは裏庭、プラチナムマウンテンの前だった。

“ お願いします、ワタシの変わりにプラチナムストーンを如月に持たせたいんです。小さくて構いません。カケラでイイんです。そうそう簡単なモノじゃないコトは承知しています。でもワタシの分身

として持たせたいんです。如月を迷子にしたいくないんです！如月の幸せはワタシの幸せです。お願いします！！”

ひたすら祈った。

時が経つのも気にせず祈り続けた。

思えば思うほど涙が流れていて。

必死に祈り続けるアタシの脳裏には、今までの如月との思い出が浮かんできて、余計泣けてきた。

どのくらいの時間が経っただろう。

祈り続けていたアタシの視界に眩い光が見えた。

顔を上げると、天から一筋の光がマウンテンに向かって放たれ、マウンテンから光と、その中に輝くストーンがアタシに向かって延びてきた。

祈りが通じた。

感動でカラダが動かない。

涙ダケが溢れてる。

『ありがとうございます！！！！！！』

硬直したカラダでアタシは何度も何度も叫んだ。

「ありがとうございます」

神楽の声がする。

神楽の声に安心したのか、カラダが動いて、神楽が隣にいるのを確認出来た。

隣の神楽はマウンテンに向かって深々とアタマを下げている。

アタシもアタマを下げた。

“ありがとうございます”

何度も言いながら。

．．．．．

「それにしても相変わらず妃杏様はマウンテンに護られていますね。」

歩いて部屋に戻る途中、神楽がふと言い出した。

『何ですか？突然。』

神楽を見ると、神楽はフツと笑った。

「ワタクシが知る限り、こんなにストーンとシンクロ出来る御方は妃杏様以外おられません。」

『そんな…。』

照れるよ。

「そんな御方のパートナーに認められるワタクシは何とも身に余る
光栄です。」

ぴやあああああああ！！！！！！

恥ずかしさマックス！！

顔から火が出そう。

『ありがとうございます。』

うつ向いて、呟いた。

『でもいつの間に3人で話してたんですか？』

顔を上げて尋ねた。

「妃杏様に“時間を下さい”と告げて出ていった後、その足で如月の元へ向かい、如月にある質問を致しました。“迷子になる覚悟で過去に行けるか”と。」

『ええええ？？』

ヘンな声出しちゃったよ。

だって、そんな質問をいきなりしたら神楽が如月の気持ちに気付い

てるコトがバレバレじゃないのよ。

「ワタクシとしたコトが迂闊でした。」

神楽、うつすら照れ笑い。

「即座に反応しましたね、見事に。妃杏様の代わりにと慌てて補足致しましたがムダでした。」

ブツ。

吹き出して笑っちゃうよ。

「如月は何も言わず、迷うコトなくワタクシを見据えて大きく頷きました。」

何だか男同士の友情ってカンジで羨ましいわぁ。

いつものアタシと一緒にいる如月なら、

“「え、つつつ!!! 神楽様???」”

くらい言いそうなカンジなのに。。。

「その後2人でbossの元に向かい、3人で真剣に、慎重に話し合いました。」

アタシはいつもこの3人の関係と繋がりを羨ましく、誇らしく思っている。

部下と上司を越えた、男同士の深い絆がこの3人にはある気がして。

他にもエージェントはたくさんいるよ。

アタシが一番見るのがこの3人だからそう思うダケかも知れないけど、この3人は特別な気がする。

少なくともbossと神楽の間には見えない絆が深く刻まれていると思う。

アタシには入るうにも入れないであろう絆が。

アタシは1人、如月の部屋に行った。

神楽はbossの元へ。

『如月…。』

アタシの声に驚き、激しくバタバタと音を立てて如月は現れた。

「妃杏様！」

メチャクチャ焦ってる。

「モニターイン（モニターに現れてそのまま入室するいつものパターのコト）して下さればよろしいモノを！！もしくは呼んで下されば参りますのに。」

そりゃそうなんだけどね。

しかも如月の部屋にアタシが現れるなんて初めてのコトだから。

『アタシが来たかったの』

ちよつと弱々しい笑顔で。

「は…、ハイ。」

アタシはストーンをギュツと握り締めたままドキドキしつつ、如月の部屋に初入室した。

「神楽様、気付いてらしたんですね。」

如月はほくそ笑んだ。

『ホントに如月達の関係が羨ましいよ。』

「エッ!?!」

アタシの発言に、如月は容赦なく驚いていた。

初めて言っただけだね。

『自分では“もちろん言いません”とか、アタシにだって言うなって言っただけだね。自分で笑ってたよ、“迂闊でした”って。きっとそんなコト忘れちゃうくらいに真剣だったんだね。』

何とも不器用な神楽らしいね。

『人間、自分のコトはまるっきり鈍感だけど、人のコトには敏感なんだって言ってた。』

「そうでしたか。」

照れ臭そうな如月。

『コレ…。』

如月の目の前にアタシは握り締めたままの右手を差し出した。

「エッ？」

ポカンとする如月。

『手を出して?。』

ポカンとしたまま言われるがまま手を差し出した如月は、アタシが手を開いて、ストーンを如月の手に乗せてアタシの手を引いた瞬間、とてつもなく短く絶句に程近い声で驚いた。

『アタシが行けない代わりに、マウンテンにカケラでもイイからアタシの分身として持たせたいってお願いして頂いたの。大事にしてね。』

アタシの目にも、如月の目にも、うつすら涙が浮かんでいた。

「ありがとうございます!!!!!!」

アタマを深々と下げて、声にならない声で叫んだ。

たまらずアタシはアタマを下げたままの如月に抱き着いていた。

『大丈夫、こつちにはbossも神楽もいるし、何てったってストーンが一緒なんだから。』

そう言って。

如月は翌朝、過去へと1人、旅立った。

〈第4章〉 without you

皇女に正体不明の物質のコトを話せたのは、判明した翌日の夜だった。

と言ってもアタシの口からでは無く。

お母様に言われたの。

“「今回、皇女からの御依頼で妃杏達が調べたコトはワタクシから皇妃に話します。その上で、結果は皇妃から皇女に話してもらいうにワタクシが伝えますから、妃杏は皇女が言ってくるまで黙ってなさい。」”

って。

アタシは何も言わず受け入れた。

だって、下手にアタシが話して、皇女の気持ちを逆撫でなんてしちゃったらと思うととてもじゃないケド言えないよ。

“皇女の言う通り、実はみんな気付いていた”

なんて、デリケートなコト言えるワケ無いよ。

だからお母様の言う通りにして、お母様にお任せするコトにしたの。

アタシはただひたすら如月の無事を祈って。

もちろん、如月が過去にいるコトはウチらダケの秘密だよ。

あくまでも如月はまだ休暇中。

そりゃいくらなんでも言えないよ。

そう言えば、bossに如月の気持ちがバレちゃった時、真っ先に弁明したのは神楽だったそうぞ。

“「上司のワタクシが手本になってないのでワタクシの責任です！
！」”

って、深々とアタマを下げたらしく、さすがにbossも笑うしかなかったって。

如月が言ってた。

“「ホントに神楽様にはどこまでもアタマが上がりません。」”

って目を細めながら話す如月もまた、カッコよかったな。

アタシまで嬉しくなっただしね。

ホントに部下想いなんだね、神楽は。

アタシはどこまでも周りに恵まれてんだなって思う。

神楽の言う通り、確かにアタシは誰よりも護られてるのかも知れない。

「如月は無事に到着したようですよ。」

神楽が現れた。

空いてる時間はずっとPPで如月のコトを見守ってあげてる神楽。

アタシと神楽とbossのPPから逐一如月の行動をチェック出来るようにプログラムしてくれたみたいで、アタシも気になって、暇さえあれば見ている。

今は公務ですつと見れなかったから、気にはなっていたんだ。

ソレを見計らってか、神楽が教えてくれた。

「アイツには強力過ぎる御守があるから大丈夫ですよ。ご安心下さい。」

うわあああああ…。

久しぶりだワ、神楽の“ご安心下さい” 光線！！

神憑りのなパワーは未だ衰えず。

地球にいた時はしょっちゅうこの光線にヤラてたケド、こっちに
来てからはご無沙汰だったから、久しぶりに見ると通常の何万倍も
強力に見えるワ。

『皇女の為って言う、目には見えない凄まじいパワーも如月にはあるからね。』

アタシは微笑ましくなっていた。

“誰かの為に”ってパワーは、計り知れない力を産み出すコトがあるって、何かで聞いたコトがあるから。

羨ましくもあるけどね…。

「それよりも心配なのは皇女です。それとなくマールス様にはお伝えしておきましたか。」

一転、暗い空気が漂う。

『アタシも心配です。如月が間に合えばいいんだケド、まさかそれはさすがにナイですよ。』

「ハイ…。1人ですからね。イントロードも何も使わないで1人で言うのは時間を要しますからね。」

神楽の表情が神妙だ。

リスクを最小限に抑える為、何も技術は使わない方がイイってコトになったの。

だから、如月の直接交渉しか頼れない。

“それでもイイ。無事に戻って来られて、皇女の記憶から消えない為なら。”

って、覚悟を決めてたよ。

今までの如月とは思えない程カッコよくて、男らしくて、潔かった。

ほんの一瞬だけ、ドキッとしちゃったもん。

「マールス様がおられますから大丈夫だとは思いますが。」

もう頼れるのはソコしか無い。

アタシと神楽や如月と違って、皇女とマールスさんは皇女が産まれた時からの付き合いだ。

皇女のコトを誰よりも知ってるのはマールスさんだ。

だからマールスさんを信じるしかナイのだケド…。

気掛かり、2つ・・・。

「妃杏、今から行ってもイイかなあ。」

夜、皇女のコトを思いながらばんやり月を眺めていたら、皇女がモニターに現れた。

ドキッとしてしまった。

『どうぞ。お待ちしております。』

暗い雰囲気 of 皇女につられて、アタシまで暗くなってしまうていた。

「boss達も呼べるかな。あと妃杏ママにも。」

ドキッ!!

如月は、、、

『かしこまりました。』

まさか休暇中とは言えないよな。

皇女の依頼の真つ最中にノンキに休暇中ですなんて、言えるワケが無い。

仕方無い、出張とでも言っておくか。

お母様とbossはすぐに現れた。

神楽は遅れて登場。

如月のコトが気にはなるケド。

こっそりPPはONにしたまま。

「色々迷惑掛けてゴメンね。ママから話は聞いたよ。妃杏ママにまで迷惑掛けてしまって申し訳ありませんでした。」

いつになく弱々しい皇女に、アタシは身が引き裂かれそうになる。

「とんでもありません。お役に立てず何と申し上げてよいのやら。」

お母様も恐縮気味。

「ママに言われました。“ 皇家の人間である以上、まずは国のコトをお考えなさい”と。」

アタシはイツキに涙が溢れた。

ダムが決壊したように涙が溢れた。

と同時にお兄様のコトや、自分のコトがアタマに浮かんた。

皇家の人間だと言うコトを忘れて地球で何不自由なくアタシが暮らしている間、お兄様は皇家の人間であるにも関わらず継承権がなくもがき苦しんでいたコト。

当時のお兄様のお気持ちと、今の皇女のお気持ちが、違うようで同じなんじゃないかと思って胸が苦しくなって。

すぐに嗚咽に変わった。

「妃杏?」

「妃杏様、こちらへ。」

お母様や皇女が声を掛けてくれる中、神楽がアタシの肩を抱き寄せて部屋から出るように促してくれた。

「失礼致します。皇妃様、boss、お願いします。」

「分かりました。妃杏をお願いします。」

アタシはうつ向いたままで、みんなの様子を伺い知るコトは出来なかったけど、皇女の声がヤケにツラかった。

アタシは神楽の部屋にいた。

シンプルと言いか殺風景な部屋。

でもコーヒーの薫りが染み付いていて、何だかとても落ち着く空間だった。

「大丈夫ですか？」

大きなため息をついて、アタシは落ち着かせながらゆっくり話し始めた。

『“皇家の人間”ってコトバがどうしようもなく胸に突き刺さったの。アタシがいない間のお兄様のお気持ちを考えてしまっただけ。』

「そのお返しは、十分過ぎる程になさったではありませんか。」

神楽の声がいつもに増して胸に響いた。

「しかも妃杏様はツライ別れと決断を経験なさったんです。ご自身を責めるのはお止め下さい。」

“ツライ別れと決断”

確かにソレはそうだけど。

「大丈夫です。涙をお拭き下さい。皇女が心配なさってますよ。」
顔を上げると神楽の眩しい笑顔があつた。

『皇女の気持ちはアタシには分かりません。だけど、同じ皇家の間なんだと思うと自分が情けなくて…。お兄様のコトも。』

涙はもう無かった。

「大丈夫ですよ。ご安心下さい。」

ちゅど ん!!

“ご安心下さい” パワー、恐るべし…。

涙がまた溢れたよ。

何も言っていないのに、神楽はジェルシートを差し出してきてくれた。

『ありがとうございます。』

「後は如月に全てを託すまでです。」

そうだね、確かにそうだ。

気を落ち着かせて、部屋へ戻った。

『失礼致しました。』

皇女はすっかり笑顔に変わっていた。

「ではワタクシは失礼します。皇女、ごゆっくり。」

お母様はアタシの表情を確認して退室した。

「ありがとうございます。」

皇女の表情は清々しかった。

「ではワタクシもこれで。」ゆっくりどうぞ。」

bossも出ていった。

「では妃杏様、皇女とベランダへでも出られては？。我々はコチラで待機しておりますから。」

神楽まで…。

マールスさんも笑顔で頷いてくれて、オンナ2人のトークは、明け方まで続いたのだった。

如月のコトは気になってたケド、皇女とのトークも楽しくて。

こんなにゆつくり話したコト無かつたし。

アタシが地球にいた時の思い出話にもなって、皇女が璃音に似てるって話もしたら、皇女も凄く喜んでくれて。

「妃杏はステキな経験をしたんだね。」

って言った時の皇女の顔が印象的だった。

どことなく切なそうで…。

でもアタシだって皇女が羨ましいですよ。

“恋してる” んだから。

「妃杏様！妃杏様！！」

ん？

ンンン？？

ひ
や
あ
!
!
?

神樂が目の前に！

「おはようございます。お食事のお時間です。」

えつつつ

飛び起きちゃったよ。

「お休みになつておきますか？」

うわっっっ！！もうこんな時間なんだ…。

気が付いたらベランダで座ったまま寝てたよ。

今日の予定は？

寝ぼけ眼、全開爆裂！。

「本日はアカデミアと執務です。」

ふう。

ため息をついてみる。

「すぐ参ります。」

ゆっくり立ち上がる。

「かしこまりました。」

神楽は出ていった。

それにしてもビックリしたあ…。

まさか目の前にいるなんて…。

ってコトは何度も呼ばれたんだろうな。

ひやああああ。

ヘンな汗かいちゃったよ。

『遅くなりまして申し訳ありません。』

動揺を隠してみんなの元へ行った。

そう言えば昨夜から全然如月の様子見てないや。

後でチェックしないと。

まあ逐一チェックしているbossや神楽から何も言われないから
何もないってコトなんだろうけどね。

食後、さっそくアカデミアまでの間に如月に連絡してみた。

『おはよう如月。』

「おはようございます妃杏様。」

元気そうね。

安心。

「どうやら今はまだ侵攻前ようです。皇大王様にはまだ会えておりません。」

ふう…。

道のりは長いな。

相手は皇女のお祖父様の現皇大王なんだから、当然アタシも神楽もbossもまだ生まれてない。

つまり如月は誰も味方がいない。

やっぱり条件、キツ過ぎたかなあ。

「イグアス星にも行ってみますね。」

とってもイイ顔の如月にひと安心。

じゃ、アカデミアに行きますか。

．．．．．

ん？

ストーンが光ってる。

どうしたの??

心臓が自然と速くなる。

何だろう…。

『失礼します。』

一旦退席。

「如月に何かあったんでしょうか…。」

神楽も不安そう。

PPで状況をチェックしてみよう。

ん？

ンンン????

繋がらない…。

如月をキャッチ出来ないよ?…。

どういつ「ト」!?

神楽の表情にも緊張が走る。

アタシはアカデミアを早退して、神楽とbossルームに急いだ。

当然気付いたbossは、懸命に処置をしてくれてるんだけど…。

突然光が点滅に変わった。

イツキにイヤな空気が漂う。

如月に何か起きてる…。

まさか身に危険！？

『行かなきゃ！！』

黙っていられなくなった。

「妃杏様はいけません。」

bossに止められる。

『行きます！！』

アタシは突っぱねた。

bossに突っぱねたのなんて初めてだった。

「妃杏様！！」

神楽の声が荒々しかった。

『じゃあどうすればイイのよ!!!』

神楽の表情が曇った。

神楽に噛みついたのも、琉冠星に来てからは初めてだった。

「現在原因解明と復旧を急いでおります。お待ち下さい。妃杏様はお部屋で待機なさっていて下さい。」

険しい表情のbossに、アタシはおとなしく従うしか無かった。

神楽に促され部屋に向かっていたけど、アタシは裏庭に進路を変えた。

部屋で待機なんて、今は無理だった。

神楽はbossルームに戻り、bossと原因解明に努めてくれている。

アタシはただひたすら祈っていた。

如月の、朝のあの笑顔を思いながら…、

如月の無事を。

イグアス星に行ったハズの如月なんだけど…。

“お願いします！如月の居場所をお導き下さい。”

ひたすら祈った。

祈って祈って祈り続けた。

「妃杏様、ココにお出ででしたか。お身体に障ります、戻りましよう。」

神楽が迎えに来てくれた。

『“ココにお出ででしたか”って、一緒に来たじゃないですか。』

「いいえ。ワタクシはずっと妃杏様を捜しておりましたよ。」

あん?????????

耳を疑った。

『神楽様はbossと原因解明をなさってたのではないですか?』

「何の原因解明ですか?しかも“神楽様”なんてお止め下さい。ワタクシは妃杏様のエージェントなんですから。」

はあああああああああ?????

たまらず超変顔になる。

「どうかなさいましたか?御部屋に戻りましよう。」

いやあああああああ！！！！！！

夢よコレは！！

アタシは悪い夢を見てんのよ、きっと。

でもアタシ、裏庭にいたよねえ。

今もいるよ。

まさかアタシ、裏庭で寝てんの！？

『如月は？』

「誰ですか？ソレは。」

とても冗談を言ってる雰囲気じゃ無かった。

ダメだ、気を失いそう…。

どうやら夢じゃなさそうだ。

b o s s さ え も 如 月 を 忘 れ て い る 。

ど う な っ て ん の よ 一 体 … 。

ま さ か 完 全 に 迷 子 に な っ ち や っ た っ て の ？ ？

ア タ シ は ま た し て も 裏 庭 に い た 。

コ コ し か 居 場 所 が な い 気 が し て 。

『 如 月 … 』

涙 が 止 ま ら な っ た 。

ス ト ー ン は 点 滅 し た ま ま 。

如 月 、 ド コ に い る の ？

P P で 如 月 の 位 置 を 改 め て 確 認 し て み て も 、 や っ ぱ り サ ー チ 出 来 な
い 。

気 が お か し く な り そ う だ よ … 、 如 月 。

こ の ス ト ー ン の 点 滅 は 、 き っ と 如 月 の 異 常 を 示 し て い る ん だ と 思 っ っ 。

だ け ど ど う も 出 来 な い … 。

ど う し た ら イ イ の ？

プ ラ チ ナ ム マ ウ ン テ ン に 祈 る し か な い よ 、 も う … 。

“ 妃杏様…”

『 如月！！！！』

如月の声だ。

ストーンの点滅が眩い光に変わった。

『 如月いい！！！！』

とにかく叫んだ。

『 ドコにいるの！？』

姿が見えない如月に向かって。

「 すいません、迷子になっちゃいました。もう戻れません。」

如月の声が笑っていた。

『 何言ってるのよ、帰ってくるって言ったじゃない。ストーンもあるんだから諦めないで！ストーンに祈って！！アタシも祈るから。』

泣きながら叫んだ。

如月の顔が焼き付いて離れない。

「 皇女とガイルが婚約しなきゃソレでいいです。」

!!!!!!!!!!!!!!

如月…。

『ふざけないで！。それでもアタシのエージェントなの？そんな弱
つちいエージェント、認めないわよ。』

考えるより口が先だった。

「でも侵攻は防げましたよ。防いだと思ったら、時空の歪みにハマ
っちゃってドコにいるのか分かんなくなっちゃいました。お恥ずか
しい限りです。」

『ちよつと待ってて。』

アタシは猛ダッシュで部屋に戻り、皇女にコンタクトを取った。

「どうしたの？妃杏。」

様子は至って普通だ。

『皇女って婚約者いましたっけ。』

息を切らすアタシにヒキ気味の皇女。

「いないよ、んなもん。何言ってるの！？」

笑い飛ばされた。

・・・良かったあ。

『失礼致しました。』

再び裏庭に走った。

『如月いいい！！アンタは無事、任務を遂行したよ。皇女に婚約者はいなくなってるよ。』

「良かった。ソレだけで十分です。」

『ふざけんじゃないわよおおおお！！！！！！！！』

涙が止まらない。

力の限り叫んだ。

その瞬間、マウンテンが神々しい光を放った…。

〈第5章〉I miss you

目を覆う程の光が治まると、アタシは見知らぬ場所にいた。

周りは全て焼け野原。

赤茶の大地が広がる。

「妃杏様？」

はっ！！

『如月！！！！』

声のする方を見ると、やつれた様子の如月がいた。

思わず抱き着いちゃった。

感動の再会。

『ストーンに祈りが通じたのよ。』

「妃杏様のお陰です。」

・・・でも、

どうやって帰ればいいの？

PPで神楽にコンタクトを取った。

・・・取れない。

繋がらない。

気が遠くなりそうだ。

『アタシも迷子?』

再び泣き顔。

「妃杏様が来て下さって、力が出ました。ちょっとお待ち下さいね。」

「

そう言ってPPをいじり始めた。

「誰かいるのか?」

はっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

誰か来る!!!!。

何もない野っ原。

逃げも隠れも出来ない。

ウチらは無防備でただ立ち尽くすしか無かった。

『か……ぐら??』

目を疑った。

神楽にそっくりな男性が、銃らしきモノをウチらに向けながら歩み寄ってきた。

「神楽様？」

やはり如月にも神楽に見えるみたいだ。

アタシの錯覚なんかじゃ無いんだ。

「イグアス星の生き残りか？」

『エッ！？』

「イグアス星？」

ココ、イグアス星？

『妃杏と申します。隣はエージェントの如月と申します。』

とりあえず丁寧にあい拶してみた。

いかなる相手にもまずは礼を尽くせとお母様に教わったから。

「見たトコロ、生き残りでは無さそうだな。」

顔はどう見ても神楽なのに、言葉遣いが神楽っぽくないのが不自然。

笑いそうになっちゃうよ。

『恐れ入りますが、ココはどこで、今は何年ですか?』

怖いもの知らずなアタシ。

「何を寝ぼけたコトを言うんだ、オマエは。気が触れたのか? ココはイグアス星。と言つてもたつた今我々が侵攻してサルミナ星になったがな。今はIK728年だ。」

あいけーなにいはち??

しかもサルミナ星がイグアス星を侵攻????

アタシも如月もあんどろ。

そんな年号、聞いたコトないよ?

「つかぬことをお伺い致しますが、今のサルミナ星の皇王様はどんなですか?」

如月が尋ねた。

「オマエ達、皇王様のお知り合いか?」

どうしても神楽にしか見えない。

『シュナ皇...』

皇子じゃないよね。

『シユナ様やカルラ様は良く存じております。』

ホントなら、“シユナ皇子”と“カルラ皇王様”なんだけど、何せいつの時代か分かんないから敬称略で。

「なぜ祖皇王や祖皇大王の名を知っておるのだ。」

また声がした。

アタシは心臓が飛び出そうになった。

だって、現れたのが

『如月…。』

なんだもん。

如月なんかコトバになってないし。

「皇王様。」

こつおつさまああああ?????。

如月があ???

イヤ、如月が皇王様なワケでは無いけどね。

でもなんで誰も如月と皇王様がそっくりなコトに気付かないの?

そう見えるのはウチらだけなの?

ん？

驚きのあまり、もう1つのキーワードを危なく聞き流すところだった。

シユナ皇子やカルラ様が祖皇王や祖皇大王・・・と、言うコトは・・・

「どうやら未来に来てしまったようですね。」

如月も察したようだ。

しかもとてつもなく。

『そりゃ迷子にもなるよね・・・。』

時空、歪み過ぎだろ・・・。

諦めを通り越して、ワクワクに達していた。

「ではルアナ様は？ご健在ですか？」

如月が揚々としている。

「大お祖母様をご存知とは、何者だ。」

お・・・ばあ、、様ああ؟؟？

しかも、“大”？

皇邸に連れていかれたアタシと如月は、かなりの賓客扱いを受けた。

何でも、皇王（如月の曾孫）が言うには、やっぱり如月とルアナ皇女は結婚するらしい。

で、その何十年か後、シユナ皇子の御子孫が途絶えてしまい、ルアナ皇女の血筋の、皇王の父上（如月の孫）が継承するんだけど、

その頃イグアス星が結局サルミナ星を侵攻してくるらしい。

結構な長期戦になり、琉冠星が援軍に入り、しまいにはこのプラチナムストーンのお陰でサルミナ星が勝利したらしい。

何でも、アタシとプラチナムマウンテンが犠牲になって助けるらしい。

だからアタシはかなりの英雄らしい。

だけどその影響で、琉冠星は自然消滅してしまうのだそう…。

かなりの衝撃だった。

で、その数十年後が現在で、たまたまいグアス星に偵察に来ていた神楽のそっくりさん（マリアスさん）のモニターがウチらをキャッ

チして、発見されたってコトらしい。

ウチらの時代でさえかなりイリユージョンな世界なのに、それからさらにイリユージョン度合いがパワーアップして、この時代の技術はイリユージョンをはるかに越えていた。

だから、ウチらが過去から来ちゃったコトに、誰も何の違和感も驚きも見せずに、それどころかウチらを帰してくれる手配までしてくれるコトになった。

まあ、この時代のサルミナ星の人達からしたらアタシは英雄以外の何者でもないだろうからね。

でも、フクザツ……。

琉冠星が無くなっちゃうなんて。

サルミナ星を助けた際のプラチナムストーンのパワーが強大過ぎて、パワーが暴発しちゃって消滅しちゃったんだって。

琉冠星のみんなは、寸前でそれぞれ逃げれたらしいんだけど。

「いかにも妃杏様らしいですね、身を呈して護っちゃうんですから。」

用意された部屋で2人、未来の空を眺めながら話してた。

『如月、良かったね。きつとこの努力は報われたんだよ。』

アタシは何よりそのコトが嬉しくてたまらなかった。

もう、アタシも如月もこの時代にはとっくにいない。

いるのは如月そっくりな子孫と、神楽のそっくりさん。

「マリアスさんて、誰の子孫なんですかね。どうみても妃杏様と神楽様ですけど…。」

如月の疑問は、アタシも感じてた。

でも、もしそうならアタシの正体がバレた時に名乗ってきてもおかしくないよねえ。

『他人のそら似なんじゃないの？』

そう言うコトにしよう。

「でも、ワタクシ達がこの時代に現れてしまつて、タイムトラップが起きてしまわないですかねえ。」

この如月の疑問も、やっぱりアタシも感じてる。

いざ戻ったら、皇女と如月は結婚してなくて、神楽もアタシの婚約者でもなんでもなく……

『ああああああああ！……！……！……！』

ひきつり顔で叫んでしまった。

「どうしたんですか妃杏様！……」

つられて取り乱す如月。

『アタシが如月と裏庭でシンクロした時、アタシ以外のみんなの記憶から如月が消えてた。しかも神楽がアタシの婚約者じゃなくなってた。』

メチャクチャ心臓が暴れてる。

「でもそれは我々が子孫に会う前ですよねえ。大丈夫ですよ。」

如月がやたらとノンキに見えてくる。

『戻ったらどうなってんのかなあ…。』

動揺しながらも、また空を見上げた。

「確認しますか？マリアスさんにでも。」

全然平気そうな如月。

そりゃそうだよね、自分と皇女が結婚してるコト知るんだもん。

『怖いからいい。何だか神楽に逢いたくなっちゃうし…。』

神楽に出逢ってからこんなに神楽と離れたの、初めてだから。

しかも神楽のいないトコロに。

そっくりさんはいるけど。

神楽、今頃どうしてるかなあ。

2度も継承者がいなくなつて、ロイヤルゲートはさぞかし大騒ぎだろうね。

なんて、ノンキなアタシ。

帰れるコトが確かだから言つてられるんだろうけど。

「妃杏様、お時間よろしいですか？」

うおっ！！！！！！

マリアスさんが現れた。

この時代はモニター越しの移動じゃなくて、直接の空間移動で現れる。

まずは立体画像が現れて、良ければ実体が現れる。

『ハイ。どうぞ。』

如月は今、皇王とお話中。

しかし、ホントに神楽だよな…マリアスさんて。ココまで似るか！？ってくらいに。

否応なしに笑顔になるよ。

「まさかこのような形でホンモノの妃杏様にお逢い出来るなんて思いもしませんでした。この惑星の救世主ですから。」

何だかテレちゃうなあ…。

『アタシがやったコトなのにアタシが知らないのもヘンな話だけだね。』

ニヤニヤしちゃうよ。

「もしも今、同じような状況におかれたらどうなさいますか？」

声まで似てるように感じてくるよ。

『そりゃサルミナ星が助かるなら、迷わず未来の自分と同じコトするよ。』

アタシのあまりのあっけらかんな態度に、マリ阿斯さんは驚いているみたいだ。

何も言えないでいる。

アタシは嘘偽りない気持ちで続けた。

『だってサルミナ星の危機は琉冠星の危機だもん。国を護るのは皇王の役目だから。』

さらにコトバを失うマリ阿斯さん。

アタシは、何も言えないでいるマリ阿斯さんの為に、今回、ウチら

がココにいるコトの発端の話 시작했다。

皇女とガイルの話、

“サルミナ星の危機は琉冠星の危機” って話、

その危機がガイルの仕業だっけコト、

ソレを阻止しようと倫理を無視して、万全の体勢で無理矢理如月を過去に行かせたコト、

のハズなのに時空の歪みが出来ちゃって、今に至るトコロまで。

マリアスさんはずっと黙って聞いていた。

「幼い頃、ワタクシの祖父より妃杏様のお話を聞いたコトがありました。」

“祖父” か・・・。

何とも言えない不思議なカンジ。

ココにいるのにいないみたいナ。

地球にいた時の逆の経験をしている。

貴重過ぎるよな…。

「“お前の祖先には偉大なお方がいる。その血筋を受けるモノとして誇りを持つ”と。」

ん？

“祖先”?????

無数のハテナがアタシの脳を支配する。

と、言うコトは??????

アタシ、目がテン。

「祖父から聞いていた通りのお方で、安心しました。こんなにお若いので“お祖母様”なんてコトすら言えませんか。」

ぴゃあああああ…。

やっぱりそうかああ。

聞きたくなかったな。

今度はアタシが黙り込んだじゃった。

でも、聞いとくか。

『アタシがいなくなった後、神楽はどうなったの？アタシのパートナーなんだけど。』

このくらい聞いたってバチは当たらないよね。

アレ？

マリアスさん、また無言になっちゃったよ？。

「…存じません。」

やっと口を開いたかと思ったら、うつ向いて呟くように発した。

エッ？

何かおかしいよ。

「ワタクシは失礼致します。お時間を頂き、ありがとうございました。」

エッ？

マリアスさんはそのまま消えていった。

如月が戻って来た後、アタシはマリアスさんの様子を話した。

すると如月からも不思議な答えが帰ってきた。

「ワタクシもさりげなく聞いてみたんです、マリアスさんの祖先は誰なのか。ところが誰も答えてくれませんでした。知らないようです。」

ますます怪しい。

何で神楽を知らないの？

「妃杏様より早死にするんですかねえ。」

如月は縁起でもない物騒なコトをサラッと云ってのけた。

だけど、そうとも考えられる。

にしてもあの様子はおかしいよ。

確実にただならぬ空気だったもん。

『やっぱり神楽じゃなくなるのかなあ、アタシの婚約者…。』

自然と涙が出ていた。

「んなワケないじゃないですか！また暴走してますよ妃杏様！-！」

如月は笑い飛ばしてるけど…、不安になるよ。

そりゃアンタはイイわよ！

・・・なんて、言いたいけど言えない…。

神楽・・・。

モーレッツに逢いたいよお。

いつもみたいに飛んできてよ。

“ご安心下さい” って言つてよ。

ダメだ、涙が止まらない。

如月は優しくそつと肩を抱いてくれた。

神楽みたいに…。

翌朝、目覚めると何やらただならぬ雰囲気を感じざるを得ない状況に陥ってしまった。

“「明朝に元の時代にお帰り頂けるように準備致します。」”

つて言われてたのに、食事の時もその後も何も言われてない。

みんなの様子が尋常じゃなく、険しかった。

しかもマリアスさん（厳密に言うとアタシの場合、“さん”はいらないんだろうけど。）がいなくて。

聞くに聞けない雰囲気の中、1人お気楽如月は何の迷いも見せずに聞いていた。

「マリアスさん、どうしたんですか？」

あまりの如月の無防備っぷりに、アタシはコトバが無かった。

「無断で過去に行ってしまったようで、タイムホイールが出来てしまっている為、妃杏様達のご帰還に影響が出てしまっているんです
！！」

心臓がカラダを突き抜けた…。

どうして？

涙がなぜだか込み上げてきた。

呆然とするアタシ。

むしろ軽い放心状態。

マリアスさん・・・。

自分達が帰れないコトはどうでも良かった。

過去に行つてどうする気なの？

昨日の憂慮の表情と関係あるの??

如月は皇大王（如月の孫）を呼び出し、物凄い剣幕で問い詰めた。

アタシは未だに放心状態。

「妃杏様と神楽様のご子孫がどうして皇家に支えてるんですか！」

止めて如月…。

胸が苦しくなるよ…。

皇大王の反応はウチらも驚くほど意外な表情だった。

「マリアスが妃杏様の子孫???」

周りの人達もざわつく。

「ホントに知らなかったんですか？」

如月、かなりキレてる。

『如月…。』

さすがに慌てて止めに入る。

「神楽様と言うのは、妃杏様とどのようなご関係のお方ですか？」

「えっ？」

如月は声に出して、

アタシは声にならずに驚く。

無性に嫌あゝな胸騒ぎが起きてる。

「何で神楽様を知らないんですか？ 妃杏様のパートナーで、皇妃王様なのに。」

今までにナイ程にアツくなる如月に、アタシはただただ泣き続ける
しかなく…。

「申し訳ありません、そう言えば妃杏様のご家族のコトは聞いたコトがありませんでした。てつきり途絶えたモノだと…。」

メチャクチャバツの悪そうな皇大王。

アタシはとにかくワケが分からなかった。

神楽を知らない？

アタシが有名なのに????

しかも神楽に限らずアタシの家族まで!?

マリアスさんの様子もおかしかったし。

「もしかして…」

皇大王のSPのジュラさんが神妙な顔で呟いた。

イツキにみんなの視線が集まる。

「前に一度だけ、マリアスがレジスタニアの丘にいたのを見たコトがあります。なぜいたのか、何をしていたのかは伺い知りませんが……。」

「レジスタニア???」

如月の声が恐ろしい程にキレていた。

く第6章く幾千の哀しみを乗り越えて

アタシは気を失ってしまっていたみたいだ。

あまりにも理解出来なさ過ぎて。

アタシが気を失っていた間、皇王と如月はレジスタニアの丘に行っていた。

レジスタニアの丘は普段は誰も近寄らず、入口も“開かずの扉”と化しているらしい。

目が覚めた時側にいたのは皇后妃だった。

皇后妃がレジスタニアについて話してくれた。

「ワタクシも聞いた話ですので自信はあまりナイのですが…」

と前置きした上で。

琉冠星が消滅した後、神楽達の消息は途絶えてしまい、誰も知るコトは無かったらしい。

その後何十年か経って、突然何者かにサルミナ星が攻撃されたらしい。

ソレがレジスタニアらしいんだけど、たった1人で攻め込んできたそのレジスタニアは、たった1人でサルミナ星に立ち向かった後、あのレジスタニアの丘で最期を迎えたらしい。

1人で闘い抜いた殊勲を讃えて丘にそのまま埋葬されて、そこはそのまま誰も立ち入らなくなってしまったと言うコトだった。

そのレジスタニアが何のために1人で攻め込んできたかは誰も知らないらしい。

アタシは何かとてつもなく嫌な胸騒ぎを隠せなかった。

『丘に、連れて行ってもらえますか？』

起き上がり、皇后妃を見据えて言った。

行くと如月と皇王はもういなかった。

何とも言い様のない不思議な空気。

静寂

混沌

狂気

憂慮

この世の全てを包み込んでいるかのような空間。

アタシはてっぺんに立って、そのまましばらく目を閉じていた。

ストーンを握りしめて…。

何か聴こえて来ないかなと思って。

アタシ、もしかしたらレジスタニアって神楽なんじゃないかって思うの。

だからもしホントに、レジスタニアが神楽だとしたら、ココにいれば何か分らないかなと思って…。

しばらくすると如月が現れた。

「どうかなさいましたか？ 妃杏様。」

『何か分らないかなと思って。マリアスさんは？』

アタシの問いに、如月は黙ったまま首を横に振った。

ダメか…。

神楽…。

マリアスさん…。

2人のコトだけを考えて、それからどのくらい経っただろうか…。

ストーンから一筋の光が放たれた。

光は丘のある場所に延びた。

アタシはすぐさま光の射す場所に走った。

行つてすぐに、ストーンからまた光が放たれた。

『マリ阿斯さん!!』

何故か光からマリ阿斯さんが映し出されている。

「妃杏様？マリ阿斯さんいるんですか？」

え、つつつ!?

『見えないの?』

嘘でしょ??

「妃杏様にしか見えません。ワタクシがこの場所にプライベートタワーを埋め込みましたから。」

ぶらいベーとれたー????

レターってくらいだから手紙だよねえ。

如月はどうしてイイか分からずに狼狽えている。

「妃杏様…、大お祖母様がコレを見つける頃、ワタクシは過去におります。」

コレはリアルタイムじゃないのか。

背景、ここっぽいぞ?…。

「さぞや皆様大混乱でしょうね。」

当たり前だよ。

「大お祖母様方をお帰しするどころの騒ぎじゃなくなっているかも知れないコトは、謝っても謝りきれません。ただ、先程大お祖母様のお話を聞いて、我々の運命にケリをつける覚悟が出来ました。」

“我々の運命”って??

もしかしてやっぱりそうなの?????

アタシの心拍数は限界を迎えそうになっていた。

「ココにいらしたと言うコトは薄々は御気づきだと思しますので、お話し致します。」

聞きたくない…。

でも聞かなきゃいけないんだと思う。

どんなハードロックよりヘヴィメタルよりも、今のアタシの心拍数の方が速いよきつと…。

倒れないように、前もって座った。

「神楽様は…、ココに眠っておられます。」

Oh my God!

unbelievable…

気が遠くなるよ。

たまらずアタマを抱えた。

「妃杏様？」

如月が声を掛ける。

とりあえず手を上げて応える。

感情がコントロール出来なくて、涙も出ない。

何も考えられない。

「大お祖父様は御家族と地球に移住なさいました。妃杏様との想い出の地球をお選びになりました。今現在ワタクシの家族も地球におります。トコロがある時お1人でサルミナ星に攻め込んで来ました。妃杏様を喪った哀しみがどうしても癒えなかったようです。」

そんな・・・。

涙を出すコトも出来ない程ショック。

神楽がレジスタニアだなんて…………

「家族には告げずに来たそうですが、サルミナ星に何者かが攻めてきたと聞いた時、すぐに分かったそうです。その後我々が子孫だと

言うコトも、レジスタニアが神楽様と言うコトも一切知られないまま過ごして参りましたが、ワタクシはどうしても納得がいかず、このサルミナ星の皇家にお仕えし、大お祖父様の気持ちや、大お祖母様の護ったこの星を確かめようと思いました。あわよくばいつか大お祖父様の仇をとも考えていました。」

マリアス・・・さん。。。

衝撃が強すぎてアタマがガンガンする…。

処理し切れないよ…。

「ですが、あんなに嬉しそうにお話しなさっている大お祖母様を見て、だったら神楽様に攻め込むのを留まってもらおうと決めました。ですのでワタクシは神楽様を止めに参ります。」

ソコでマリアスさんは消えた。

心拍数はまだMAX。

だけど不思議と苦しさはなかった。

そばに神楽がいるから？

この下に神楽が眠っているのかと思ったら、不謹慎な話だけどモレツな安心感がわく。

アタシはたまらず寝転がっちゃった。

「妃杏様？御加減優れませんか!？」

メチャクチャ慌てる如月。

『この下に神樂が眠ってるの。マリアスさんはレジスタニアを止めに向かったわ。皇王に伝えて！！アタシはココにいるから。』

空を仰ぎながら如月に伝えた。

如月はさすがにコトバになって無かったケド、とりあえず無言のまま皇王の元に向かってくれた。

時空の歪みって、こんなメチャクチャなモノなの？

そりゃ“時の迷子”は戻って来れなくもなるよな…。

アタシも今、正直帰りたくないモン。

「妃杏様！！」

皇王が現れた。

「マリアスの居場所を突き止めました。妃杏様も参りますか？それとも元の時代にお戻りになりますか？」

ドキ ン！！！！

せっかく治まった心臓がまた暴れだす。

どうしよう…。

どうしたらイイの??

アタシが直接神楽を説得?

だけどそんな神楽を見たくない。

だけどマリアスさんや遺されたみんなのコトを思ったら、行くしかないよね…。

神楽、どうしたらイイの?

アタシが行ったら思い止まってくれる?

でもいるハズのないアタシが、しかも過去のアタシが行っても思い止まってくれる?

この下にいる神楽に向かって…。

でもこれでマリアスさんのトコロに行っちゃったらどんだけタイムトラップしまくってんだろう。

元の時代に戻るの怖いなあ…。

!!!!!!!!!!!!!!

そうだったっつ、どうせなら行っちゃうか!!

“なりません!!”

たくさんのアタシの涙が神楽の眠る丘に染みていく。

『何もレジスタニアになる必要は無かったじゃない！アタシのしたコトが無駄になっちゃうでしょ？神楽らしくないコトしないで！！だからアタシは神楽を助けに行くよ。2人の大事な家族に囲まれて暮らしてよ。ねっ？お願い！神楽…。』

泣きながら訴えた。

神楽からの答は何も無かった。

『アタシも行きます。』

涙を拭いて、皇王の元に向かった。

神楽を助ける為に…。

マリ阿斯さんのデータを元に着いたのは、ちょうど修羅場真っ最中の2人の場面だった。

『神楽…。』

神楽の顔は鬼気に溢れていた。

足がすくむ。

涙で姿がボヤけて見える。

神楽が2人いるようにしか見えないよ…。

「妃杏さ…、ま？」

かなり驚いている神楽。

そりゃそうなんだけどね。

「妃杏様！皇王様も！！」

マリアスさんも驚愕。

気まずそうな顔して。

神楽はすっかりお祖父ちゃんになっていた。

でも涙が込み上げていた。

さっき、下に眠る神楽に言ったコトバを叫んだ。

すると神楽は絶句。

緊迫した空気が流れる。

「自分のコトしか考えず、申し訳ありませんでした。何ともお恥づかしい限りです。」

神楽は笑顔になっていた。

良かったあ…。

その場に座り込んでしまった。

「まさかココに来て過去の妃杏様と未来の子孫にお会い出来るとは思いませんでした。それだけで十分です。帰ります。」

神楽は穏やかだった。

「神楽様!!」

「如月様!」

『如月?』

いつの間にか如月が来ていた。

「様なんてお止め下さい。神楽様に様呼ばわりされるのは性に合いません。」

照れまくりの如月。

そっか、この時には如月は“様”なんだね。

皇女の旦那様だからね。

ちよつと感傷的になる。

「コレ、ワタクシにはもう必要ありませんから。神楽様がお持ち下さい。」

そう言つて如月はストーンのカケラを神楽に渡した。

「如月…。」

ちよつとウルウル。

驚き硬直する神楽。

「御守りです。」

如月の笑顔はサイコーに輝いていた。

神楽はその後地球に帰つて行つた。

「じゃ、ワタクシ達も帰りますか。」

如月もアタシもスツキリしていた。

思ひ残すコトもなく。

帰つたらどんな状態になつてるかとか、全く気にならなくなつていた。

むしろ、楽しみだった。

“どんな未来が待っているんだろう”

じゃなくて、

“どんな過去が待っているんだろう”

って、とってもおかしい気分だけど。

神楽、どうしてるかなあ。

「神楽様、今頃寝込んでんじゃないですか？」

茶化す如月。

神楽に逢いたい。

『帰ろつか。』

「ハイ。」

『帰ったら如月は如月じゃなくなってるのかなあ。』

アタシ、呟いた。

「妃杏様…。」

ちょっと寂しいね。

如月の幸せはもちろん嬉しいよ。

けど、

“ 妃杏様がいてマネージャーがいてワタクシがいる。最強ですね。”

ずっと続くと思ってたのにな…。

「我々が戻る頃はまだ皇子が継承権をお持ちなんですから、まだ大丈夫ですよ。そう簡単に妃杏様のマネージャーは渡しません。」

『如月…。』

微笑む如月が、頼もしかった。

「でも、神楽様はやっぱ最後まで妃杏“様”なんですね。」

如月…。

まさかアタシがそのコトで悩んでたコト、気付いてたの？

モーレッツにどきまぎした。

「だから神楽“様”って呼ぶようになさったんですよ。皇女とお話なさってる時も、切なそうな顔をなさってましたから。」

涙が出そうだった。

『神楽は何が起きてもきつと一生アタシは妃杏様なんだろうなって気づいたの。だから開き直るしかないかなと思って、じゃあアタシが同等に見ようと思ったの。』

改めて言うのは照れくさかった。

「神楽様の生真面目さにも困ったモノですね。女心がまるで分かってないんですから。」

ぷつつつ!!

如月が言うとおかしくて笑っちゃうよ。

でも確かに如月は神楽よりは遥かに分かるかもね。

『神楽にタメ口止めろって方がムリだよ。それこそ寝込むんじゃない?』

2人で顔を見合わせて笑い合った。

敬語でもタメ語でも神楽は神楽だ。

アタシの婚約者だ。

.....

イヤ、違うかも…。

やっぱり帰るの止めようかなあ.....

「でも妃杏様? タイムトラップは、歴史をいじった時に出来るモノですよええ。今回ワタクシは歴史をちょっといじりましたが、その後の出来事は歴史ではなく未来のコトですから何も変わらないので

「はいですか？」

「おうっ??？」

「……………、そうだねえ。」

「はっっっ！！！！！」

『じゃあみんな如月を忘れたままの過去に戻るっの？』

「アタシは叫んでしまった。」

「ワタクシは皇女と結婚するんですよ？」

「……………そうだった。。。。」

「どう言うコト!？」

「神楽もアタシの婚約者じゃなくなってるのに2人の子孫は確かにいた。」

「やっぱり何らかのトラップが発生してるんじゃない?。」

「とりあえず帰りましょ！行けば分かりますよ。」

「ったく!!」

「何なのよ、人が心配してる隣で!!!」

「自分は結ばれるって分かってるからって早く帰りたいもんだからっ」

て…。

顔が尋常じゃない程にほころんでるよ。

確かにアンタの言う通り、“行けばわかる”かも知れないけどさあ…。

はあああああ。

深く大きなため息。

やっぱり歴史はいじっちゃダメなんだね。

つくづく痛感…。

約1名浮かれてるヤツはいるケド…。

どうせなら神楽のアタシに対する接し方が変わっててくれたらいいのにな…。

さつき“敬語でもタメ語でも神楽は神楽だ。”って言ったばかりなのにな…。

はああああああああ。

また深い大きなため息が出ちゃうよ。

「大丈夫ですよ。きっと大丈夫です。」

如月の笑顔が珍しく眩しく見えた。

〈第7章〉remember me

プラチナムマウンテンの前に着いた。

と言うコトはアタシが光に導かれて如月と合流する前？

「お部屋に戻りましょう、妃杏様。」

如月に促され、ゆっくり歩いて戻った。

2人とも無言で。

如月もきつとドキドキしてるんだろう。

何も変わってなきゃイイけどな。

みんな、如月のコト分かってるよね？

また“誰？”なんて言わないよねえ。

緊張する。

心臓、飛び出しそう…。

如月がずっと手を握ってくれている。

“きつと大丈夫ですよ。”

って言ってくれてる気がした。

目の前から神楽が来た。

迎えに来てくれたの？

「何やってんだよ如月！さっさとセンターホールに行け！！って何でオマエマネージャーのスーツ来てんだよ。最後だからって…。」

ん？

神楽は如月のアタマをこついた。

何だか神楽、雰囲気違くない？

何だかフランク…。

で、“何でマネージャーのスーツ来てんだよ。”

って、どー言うコト??

如月はマネージャーだもん、マネージャー用の黒と白のスーツ着て当然じゃない…。

アタマの中軽く混乱。

そして胸騒ぎもする。

如月もぽかんとしながらも走り去って行った。

ん！！！！待てよ?????神楽、もしかしてアタシにも…。

「妃杏様も参りましょう。如月の儀式の準備をしなくてはなりません。」

ダメか・・・。

やっぱり“参りましょう。”だったか…。

ちょっとガツカリ。

“敬語でもタメ語でも神楽は神楽”

ってさっき言っただけなのにね。

どうせ変わるならココが変わって欲しかったな。

って、あれ???

『如月の儀式って、何かあったの?』

皇女との婚約?

「何をおとぼけになられてお出ですか?如月の退官の儀式ですよ。妃杏様もお着替なさって下さい。」

た、いか…ん??????????

『どうして!?!』

すっとんきょうな声を上げてしまった。

「妃杏様、おかしいですよ？如月は今日で退官ですよ。サルミナ星に婿に行きますからね。」

そんな・・・。

『だってルアナ皇女には皇位継承権が無いからサルミナ星に嫁ぐ必要はナインじゃないの？』

“まだ皇子が継承権をお持ちなんですから”

って言った時の如月の顔が浮かんでいた。

やっぱり如月と離れちゃうの？

ヤだよ…。

「妃杏様！どうかなさいましたか？先程からまるで何も御存知ナイないかのような発言ばかり…。サルミナ星の次期皇位はルアナ様ですよ？」

はいいいいいいいい？？？？？

目が思いっきりつり上がっていた。

“何も御存知ナイかのような”って、御存知ナイよ！！

『シユナ皇子は？』

「シユナ皇子は弟君ですから継承権はナイではないですか。妃杏様、

脳に何か衝撃でも受けられましたか？」

そりゃさっきから衝撃受けっぱなしですよ。

神楽が言ってるのという意味はだいぶ違うケド…。

あれっ？そう言えば…。

『如月って、どうやって阻止したの？』

歩きながら神楽に尋ねた。

「妃杏様？さっきから一体どうなさったのですか！」

ん？

アタシ、もしかしていなくなったコトになってない？

迎えに来た時も至ってフツーだったね…。

“「妃杏様ああああ」”

って、“感動の再会”的なモノもちつとも無かったし…。

『何だか時差ボケしちゃってるみたい。』

「時差ボケ？ですか？どこかに行かれたのですか？妃杏様やはりおかしいですよ？妃杏様はずっとあの場におられたではないですか。如月は、1人でイグアス星に乗り込んで皇女とガイル様の婚約を解消するよう話を付けて来たのですよ。」

ふ

ん…。

そうなってんだ…。

やっぱりアタシがいなくなったコトは変わってるみたいだね。

実際、如月がどうやって阻止したかは聞いてなかったから何とも言えないね。

じゃ如月が過去に行ったのも違ってるのか？

『でも良くそれで婚約解消出来たね。』

さりげなく聞いてみる。

「妃杏様が如月に託して下さったストーンのお陰です。妃杏様のパワーが通じたんですよ。」

なにい?????

歴史がかなり入り乱れてるぞ??

じゃあ如月が阻止出来たトコで終わってるってコト!?

如月が迷子になったトコから消えてる(変わってる)ってコト!?

・・・みたいだね。

にしたって、シュナ皇子がルアナ皇女の弟って、そこ、変わる意味

あるか???

イヤ、ナイだろ…。

そのせいで如月と別れなきゃいけないんだよ？

『じゃ、アタシのマネージャーは？』

アタシの質問は、とんでもなく奇っ怪だったようで、冷静沈着な神楽の顔色を一変させてしまった。

「妃杏様？ちよつと脳波を診てみますか？」

アタシ、そんなにヘンなコト聞いた！？

「妃杏様のマネージャーはもともとワタクシではありませんか。」

あん?????????

『神楽は皇妃王教育があるから如月にマネージャー変わったじゃない…。』

嫌あゝな雰囲気だぞコレは…。

神楽の顔色が急速的に赤くなる。

神楽とは思えないほど取り乱している。

「なぜワタクシが皇妃王教育を！そんな恐れ多いにも程があります。何をお戯れになつておられますか！！早く戻りましょう！！！」

神楽、尋常じゃなくうるたえてる。

何だかやっぱり嫌な予感。

核心につくのはさすがに怖かったから、その先は聞かなかった。

如月の記憶がみんなから消えてなかったコトをヨシとして。

部屋に戻り、アタシは着替えを済ませ、センターホールに向かった。

如月が退官……。

戸惑っているのはもちろん如月も同じだった。

アタシが入室するなりアタシに駆け寄ってきて、嘆いてる。

「どうなってますか？皇女が継承権って……。」

『しかもどうやら如月がアタシのマネージャーだったコトも変わってるみたいだよ。』

「何でこんなコトに……。」

如月、泣きそう。

『何て顔してんのよ、今から如月の晴れの舞台が始まるんだから。』

アタシは出来る限りの笑顔で言った。

内心、かなりフクザツだけど…。

退官するエージェントは、退官式はbossが着る色である、全身黒のスーツを着用する決まりがある。

デザインこそbossのモノとは違うものの、何だか物凄く凛々しく見えるよ。

『カツコイイよ、如月。』

目の前の如月の姿が涙でにじんでいた。

「妃杏様…。」

目を潤ませる如月に、思わず抱きついちゃった。

たまらなく愛おしく思えちゃって。

「何だかフクザツです。」

弱気な如月。

『胸張りなさいよ。如月が幸せならいいから。今までアタシにいっぱい尽してくれたんだからこのくらいバチ当たらないよ。』

アタシも確かにフクザツだけだね。

如月の男泣きは、とってもステキだった。

式の中で、如月はずっと泣いていた。

何だか実感湧かないな、如月がいなくなるなんて…。

今までの如月との思い出が溢れ出てくる。

でも、如月にとってはウルトラスーパーハッピーエンドなんだよね。

だから笑顔で送らなきゃいけないのに、

涙が止まらなかった。

「妃杏様…。」

声を掛けてくれた神楽は、今までの神楽じゃない。

ただのマネージャー。

それも涙の原因に、少しは絡んでいる。

別れてないのに別れちゃってるみたいで。

「エージェントとしてはAランク止まりだったが、この上ない大出世が出来て、上司として誇らしく思う。オマエはエージェントの誇りだ。退官おめでとう。」

神楽が如月に掛けたコトバがアタシと如月には違和感炸裂だった。

如月は“Aランク止まり”なんかじゃないよ!!

マナージャーに上がったじゃない!!

アタシは心の中で叫んでいた。

式の後、アタシは部屋に戻った。

現実には堪えられなくて。

如月のお別れパーティーが行われている中、体調が優れなくて帰って来ちゃった。

如月も顔色が悪かった。

如月も抜けたくて仕方無かったみたいだけど、さすがに主役は抜けないよね。

ゴメンね、如月。

アンタはまだイイよ。

皇女と結ばれるんだから。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

もしかして!?

如月が皇女と一緒にになれる分、アタシが神楽と離れたってコト!?

だってアタシと神楽はストーンが導いてくれるんじゃないの????

これからのかなあ…。

どうしたらいいんだ？アタシ。

ストーンを見つめていた。

やっぱり過去は変えちゃいけないんだな。

マリアスさん、大丈夫かなあ。

でもアタシのパートナーが神楽じゃなくなったら、マリアスさんもマリアスさんじゃなくなるのかなあ…。

アタシが見た未来は、確かにアタシと神楽は結婚してたのに…。

やっぱりこれからのかなあ。。。。。

不安でたまらない。

考えれば考える程、吐きそう…。

ダメだ、少し休もう。

「妃杏様。」

目覚めると、目の前に神楽がいた。

「お加減…、いかがですか？」

珍しく弱気な神楽だ。

アタシは何も言えなかった。

あまりにもごちゃごちゃし過ぎていて。

『如月は？』

整理が付かず、ボー然とした状態で尋ねた。

「如月もどうやら具合が優れないようで、早めに終わってしまいました。」

そりゃそうだ。

沈黙の空気が流れる。

「如月と妃杏様、何かあったんですか？」

そりゃあったよ、大アリだよ。

話してもどうしようもないコトだケドね。

アレは、“過去の話”になるの？

それとも“夢の話”になるの？

涙が出ていた。

「妃杏様？」

動揺する神楽。

ホントに覚えてないの??神楽あ…。

アタシは気持ち、変わってないのに…。

やばっ！涙止まらないよ。

「妃杏様!!」

ますますあたふたしている神楽。

「コーヒー、お持ち致します。」

いるに堪えなかったのか、神楽は出ていった。

アタシは無意識のうちに、またストーンを見つめていた。

どうしちゃったの？

どうしたらいいの??

ストーンに問いかけて。

「妃杏、いいか?」

お父様!?

慌てて涙を拭う。

『どうぞ。』

アタシ、あたふた。

「神楽がいたんじゃないのか?」

キヨロキヨロするお父様。

『コーヒーを用意に参りました。お父様の分もお願いしますね。』

ん?デジャヴか???

ちよつとだけ違うケド…。

『お父様にもコーヒーをお願いします。』

「かしこまりました。」

何のためらいもなく即答。

「気分は大丈夫か？」

アタシの顔をジッと見ている。

目を見られちゃ泣いてたコト、モロバレだよね。

『何とか…。』

ごまかしてもごまかし切れないのに、うつ向いて答える。

「失礼致します。」

神楽登場。

やっぱりデジャヴだな。

「神楽も座れ。」

ん？

「失礼致します。」

何？？

新たな展開だ。

「しかし、如月は大出世だな。妃杏より先に決まってしまったのが何だが。」

とか言いながら、嬉しそうなお父様。

「で、だ。」

おや？

アタシは無性にイヤな予感を感じていた。

お父様の表情が物言わぬ何かを感じさせていて。

来たか？

そんな不安と期待が交錯した状態で、

「妃杏は想う相手はいるのか？」

来たあああああああ！！

前の展開がイツキにフラツシュバックする。

アタシに迷いは微塵もなかった。

『ハイ、おります。』

お父様をジッと見据えて。

今度こそ言ってやったぞ。

かなり自己満足。

神樂の方を見れない。

「身分違いと言うのは十分承知致しております。」

おいおい？

前回と全然違うじゃないかああああ！！

「自分にウソはつけない、、から・・・。」

んんん？？？

頑張ってタメ語で話そうとしてないか？

きゃああああ！！！！！！

神樂がタメ語おおおお

！！！！！！

こんな展開ならアリだよ。

大歓迎！！！！！！

「妃杏・・・さ、ま・・・。」

アタシ、嬉し泣き。

神樂の顔がにじんで見える。

嬉しくて嬉しくて嬉しくてたまらない。

『様はいらない。2人の時はマネージャーモード止めて!?!』

言いたくて言いたくて仕方無かったコトバ。

時を越えて、やっと言えたよ。

今思えば、どうして言えなかったんだろう…。

たったコレだけなのに…。

「ずっと、好きで、、だったよ。妃杏……。」

ぴやああああ
!!!!!!

Oh my God!!!!!!

もう、顔が崩れきってるよ、完全に。

でも、そんなコトどうでも良かった。

とにかく嬉しくて。

『もう一度言って!?!何度も言って!?!』

泣きながら。

「妃杏、好きだよ。」

気絶しそう…。

嬉しすぎて。

今までの“敬語神楽”が甦る。

こんなに嬉しくて泣くの、久し振り。

『ありがとう。ずっと待ってたよ。』

アタシと神楽の唇が触れ合った。

アタシは初めてじゃ無いケド、神楽は初めてだから震えてる。

レジスタニアの丘で話した時の神楽も、サルミナ星を攻め込む寸前の神楽も、敬語だったのに…。

戻って来たコトでまたトラップが現れたのかな。

神楽の心音が聴こえてきそうな雰囲気の中、アタシはノンキにも、そんなコトを考えていた。

どうでもいつか、今は…。

如月の願いも、

アタシの願いも叶ったんだから。

いい方向に変わったってコトで、

いいんだよね。

そつとストーンに問い掛ける。

その時、ストーンから金色にも見える光が射した。

まっすぐに天まで延びたその光は、無数の星が降り注いでいた。

空を見上げる神楽。

「コレは…。」

驚く神楽。

『やっぱりどんなに変わっても、コレは変わらないんだね。』

アタシも降り注ぐ星に向かって呟いた。

「えっ？何？」

『何でもナイの！！』

そう言つて、今度はアタシから神楽にキスした。

ほんの一瞬、かすかに触れただけだったケド。

ありがとう、プラチナムストーン・プラチナムマウンテン！！

2回もこんな想いさせてもらえるなんてねっ。

ちゃんと元の時代に帰って来れたのも、未来を知れたのも、神楽を

阻止出来たのも、ストーンやマウンテンのお陰です。

ホントにありがとうございます。

『如月？』

その日の夜中、アタシは如月を呼び出した。

如月は明日、旅立つ。

神楽が帰り、1人になったらまた如月のコトが復活しちゃって、どうしようもなく切なくなってきた。

いつもならもう寝ててもおかしくない時間だったけど、今夜は特別なのか、ソッコーで応答してくれた。

「妃杏様！！どうなさいましたか、こんな時間につ！」

かなり慌ててる如月。

そりゃそーだよな。

『今夜で如月って呼ぶの最後だね。』

ちよっとしみじみ。

「何を仰ってるんですか、これからずっと、ワタクシにとっては妃杏様は妃杏様です。しみったれたコト仰らないで下さい。」

照れ隠しなのか、如月はいつも以上に笑っていた。

『まさかこんなに早くサヨナラする日が来るなんてね…。如月の願いが叶ったとは言え、フクザツだよ。』

まだ整理が付かないよ。

そう簡単に付くワケないんだよね。

帰ってきたその日に如月とお別れだって知ったんだモン。。。

しかも明日。

お別れったって、関係が変わるダケで、2度と逢えないワケじゃないけどさ…。

涙を堪える。

「いつでも逢えますよ。」

笑顔の如月。

ちよっとドキッとしちゃうほど爽やかだった。

『如月にはホントにお世話になったよ、最後の最後まで。』

涙を堪えながらの笑顔はちょっと引きつり気味。

「最後の最後まで？」

すかさず聞き返してきた。

アタシは話した。

一番アタシと神楽のコトを気にかけてくれた如月には言わなきゃと思つて。

『きつと如月が勇気を出して、自分で皇女に気持ちを伝えたからだよ。ありがとう。』

コレが一番言いたかった。

「違いますよ妃杏様！！」

へっ？

如月、メチャクチャ喜んでくれている。

「勇気を出したのは妃杏様ですよ。ワタクシはそうなるコトが分かつてるから言えただけです。」

如月???

それ言ったらアタシだって…。

「妃杏様は、1度は“おりません”と御答えになられているにも関わらず、しかもそれでも結ばれるコトを知っていながらその事実を覆して“おります”とはつきり御答えになったからですよ。妃杏様ご自身のお力です。おめでとうございます！！コレでお互いの願いが叶いましたね。」

如月…。

でも……………。

そうなのか?????

呆氣に取られる。

“事実を覆して…”

このコトバがヤケに心に響いた。

確かに言う時は“今度こそ”って思ったよ？

でも考えるより言う方が先だった。

だからそんなつもりは無かった。

「それにしても…、お互いの結婚前に、とんでもない秘密が出来ちゃいましたねっ！」

コトバとは正反対な、歓びの顔の如月。

“とんでもない秘密”・・・か。

そうだね。

言っても信じてもらえないだろうからね。

2人だけの秘密だね。

お互いのパートナーにも内緒のステキな思い出。

神楽、ちょっと疑ってたけど！

『それにしても wonderful な夢だったね。』

「ハイ。」

如月の顔も充実感に溢れていた。

しばらく2人で余韻にひたった。

過去に行って未来に行って…。

そうそうこんな経験、出来ないよ。

“貴重”と言うにはおこがましすぎる経験…。

2人で明け方まで話してしまった。

如月はたくさんの人達に見送られ、これでもかってくらいの満面の笑顔で旅立って行った。

アタシはいつまでも如月の跡を追っていた。

2人だけのたくさんの思い出を浮かべながら…。

『ねえ神楽。』

その日の夜。

「何？妃杏。」

ぷううううう

鼻血出してもいいですか??????

まだタメ口神楽に慣れないモノで…。

アドレナリンが全開なモノで…。

イヤ、そんなムードじゃないだろ。

心の中で深呼吸。

『1つ約束して欲しいコトがあるの。』

神楽の目をジッと見て。

「えっ？」

引きつり笑いの神楽にアタシは大真面目に言う。

『もしもこの先、先にアタシが死んじゃったり、いなくなっちゃったりしても、バカなコトだけはしないでね。』

一切笑顔は出さなかった。

呆れ気味に神楽は答えた。

「何を言い出すかと思ったら。」

完全に失笑。

実際オマエがそう言う行動に出てるから言うんだろうがああああ！！！！

と、心の中で叫ぶ。

内心キレ気味のアタシに、神楽はさりげなく微笑んで告げた。

「そんな心配いらないよ。妃杏が1人になるコトは絶対ナイから。」

アタシを見据えて。

ひゃああああああああ

気絶するううう。。。

鼻血通り越して別のモノが出そう…。

しかも全身から…。

前の過去（？未来？）じゃ味わえなかった感動。

神楽の口からこんなコトバが出るなんて…。

そう来たか。。。。

サイコーに幸せです！！！！

皇女に継承権が移ったのはかなり意味不明だったケド、そこくらいかな。

未だに“タイムトラップ”に怯えてるケド、なんとなく分かったよ。

どんな現実からも逃げちゃいけないんだって。

まっすぐ向き合って立ち向かっていかなきゃいけないんだって。

今回のコトで良くわかったよ。

過去に戻ってイグアス星がサルミノ星を侵攻するのを阻止したり、星とアタシ以外のみんなの中から如月の記憶が消えちゃったり、未来の神楽がレジスタニアになっちゃってて、ソレを変えちゃったり、

あちこちで歴史を変えたせいで戻ってくるのがイヤだったけど、逃げずにちゃんと向き合ったら新しい歴史が出来上がったた。

．．．だから思うんだ。

どんな未来も過去も全て自分自身次第なんだって。

当たり前のコトだけど、つくづく思う。

一時は、“そりゃ時の迷子だって帰りたくなくなるよな…”。って思っちゃったけど、今なら言っておかれるよ。

“どんな未来もどんな過去も、やり直せない人生はないんだよ。”

って。

“だから戻っておいで”

って。

みんなが言う程、タイムトラップは怖くなかったよ？

だから大丈夫。

このコトはアタシと如月の秘密。

お互いパートナーがいるモノ同士で秘密持つなんて、どうかとは思
うけど、言ったところで“夢物語”にしか聞こえないだろうから。

でも、あんな夢、見たくても見れないよなあ。

ホントなら神楽にも憶えてて欲しかったけど。

でも、あの過去があるから進める未来がある――

そんなステキな経験、もったいないからイツか――！

もしかしたらホントにアタシと如月の見た、夢かも知れない。

それならそれでもいいよ。

何にしてもそのお陰で明るい未来になったのは間違いないから。

そのうちいつか機会を見て、神楽や、いつか生まれてくる子供達に
話してあげよう。

アタシと如月の夢の話を……………

ステキでリアルで素晴らし過ぎた時間の話を……………

だからずっと、そばにいてね、神楽。

『ずっとずっとず　　　とそばにいてね。』

「何当たり前のコト言ってるの？離れないよ。ずっとそばにいるよ。」

タメ口神楽にはまだドキドキする。

だけど前の歴史じゃ、こんなドキドキ味わえなかったもんね

新鮮でイイわ。

神楽より、アタシが持っている2人の時間も記憶も多くてごめんね。

『ありがとう。』

そう言ってアタシは神楽にキスをした。

いくつもの想い出を胸に秘めて…。

如月とストーンだけが知る想い出を胸に……………
……………

·
·
·
f
i
n
·
·
·

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9100m/>

千の夜を越えて～虹の彼方へsecond story～

2011年8月22日21時40分発行